

べき對象は、純粹に量的差異を表はすことが出来なければならず、従つて質の同一性、等態性が前提される。これこそが價值尺度としての商品の機能にとつての第一條件である。たとへば私が、すべての商品を、牡牛、獸皮、穀物等ではかるとすれば、牡牛と牡牛と、穀物と穀物と、獸皮と獸皮との間に質的相違がある以上、事實において私は、觀念上の平均の牡牛、平均の獸皮で諸商品をはからざるを得ない。しかるに金銀は、單純物質としては常に同一であり、従つてその同一諸量は等量の價值をあらはす。直接、純粹に量的差異をあらはす機能から生ずるところの、この一般的等價物たるべき商品にとつての第二の條件は、任意の諸部分に分割すること、およびそれらを再び結合することの可能、従つて計算貨幣が感覺的にもあらはされうることに、これである。金銀は、これらの特質を備ふることに於いて優秀なるものである。

(一) 「金銀は、それにある一切のものがたゞ一つの考へ、すなはち量といふものに還元されるといふ特異の性質をもつ。それは金銀が、その内部の構成にも外部の形状にも、質の差異は少しも自然から與へられてゐないからである。」(ガリアニ、前掲書、第一章、一三〇頁)

流通要具として、金銀は他商品に比較してかういふ長所がある。すなはち、比較的多くの重量を小なる容積であらはすところの、その大なる比重に相應して經濟的な比重も大きく、比較的多くの勞働時間すなはち交換價值を、小なる容積のうちを含むことである。運搬の容易さ、一人から他人へ、一

國から他國への移動の容易さ、および出沒の自在さが、それによつて保證される。つまり、物質的動性、すなはち流通過程の「永遠に動く物」として役立つべき商品の『必須條件』(sine qua non)が、保證される。

貴金屬の高度の比重、耐久性、相對的不可滅性、空氣にも酸化しないこと、特に金にあつては王水以外の酸に溶解しないこと、すべてこれらの自然的特質が、貴金屬を貨幣退藏の自然的の材料たらしめた。だから、非常なニコレットの愛好者であつたらしいピーター・マータアは、メキシコ貨幣の一種となつてゐたカカオの殻についていつてゐる。「あゝ、祝福された貨幣よ。人類には有難なる飲料を供し、しかもその所有者を、呪はれた貪慾に汚れさせない。埋めておくことも、長く貯へることも出来ないのだから。」(新世界に於て)。

直接の生産過程内での金屬一般の大なる重要性は、その生産要具としての機能と關聯してゐる。金銀の稀少性を外にしても、鐵に、ないしは銅(古代人が使用した、その硬化状態における)に比較してさへ極めて大なる金銀の軟柔性は、金銀が生産要具として利用されることを不可能にし、従つて一般に、金屬の使用價值の基礎をなすところの金屬的特質の大部分を、金銀から奪ふ。金銀は、直接の生産過程内でもかやうに利用に乏しいのだが、生存資料として、消費對象としてもまたなくても濟むものとして見られる。さればこそ、そのいかにどの量でもが、直接の生産および消費過程を害することな

しに、社會的流通過程に入りうることになる。金銀に固有なる使用價值は、その經濟的機能と矛盾しないのである。更にまた、かやうに消極的に、餘計なもの、なくても済むものであるといふだけでなく、金銀の審美的特質は、彼らを華美、粉飾、光彩、および日曜的な諸欲望にとつての、自然發生的な材料たらしめ、一口にいへば過剰と富との積極的形態たらしめる。金銀は、いはゞ地下の世界から掘り上げられる純粹光線として現はれる。銀は本來の結合における一切の光線を反射するし、金は最高強度の色調、赤光線だけを反射するからである。が、色の感覺は、美感覺一般の最もポピュラーな形態である。さまざまのインド・ゲルマン系の言語において、貴金屬の名稱と色彩の諸關係との間に語源的關聯が見られることは、ヤコブ・グリムによつて指摘された（彼の「ドイツ言語史」を見よ）。

最後に、金銀が、鑄貨形態から地金形態に、地金形態から奢侈品形態に、もしくはその逆に、變轉しゆく能力、すなはちたゞ一回の特定の使用形態に縛られないといふ、他商品にまさる特徴は、彼らを、絶えず一の形態確定から他の形態確定へ轉換せねばならない貨幣の、その自然的材料にした。

銀行家は爲替相場をつくらないと同じやうに、自然は決して貨幣をつくらない。たゞ、ブルジョアの生産は、富を、唯一物の形態における偶像に結晶させねばならないから、金や銀がそれに應ずる化身であるのである。金や銀は自然に貨幣であるのではない。が、貨幣は自然に金や銀である。一方では、銀なり金なりの貨幣結晶は、單に流通過程の生産物であるばかりでなく、事實においてその唯一

の休止態生産物である。他方では、金銀は、完成した自然生産物であり、そしてなんら形態差別によつて分かれることなきその第一者であり、また第二者でもある。社會的過程の一般的生産物、ないしは生産物としての社會的過程それ自體は、特殊の自然生産物であり、大地の内奥に隠されて、そしてそこから掘り出された金屬である。

(二) 七六〇年に、一團の貧民が移住して南方アラゲの砂金の洗練に従事してゐたが、彼らは三人で一日三マルクの金を採取することが出来た。その結果として「金掘り」に出かけるもの、耕作を棄てるもの數が増し、翌年には國中が飢饉に悩まされた。(ケルナー「ボヘミアの鑛業の昔についての研究」シュネーベルク、一七五八年、參照)

吾々はすでに、金銀は、貨幣としての彼らに期待されるころの、常に同一價值量たるべしとの要求を満たしえないことを見た。それにしても、アリストテレスがすでにいつてゐるやうに、金銀は他商品の平均以上に永續なる價值額をもつ。貴金屬の價值の騰落の一般的な作用は暫く措くも、金と銀とが、相並んで世界市場における貨幣の質料として役立つてゐる以上、兩者の價值比率の動搖は特殊の重要性をもつてくる。この價值變化の純經濟的原因は——征服その他の政治的變革は、古代世界にあつては貴金屬の價值に大なる影響を及ぼしたが、たゞ地方的に作用的に作用するにすぎない——これら金屬の、生産に要する労働時間の變化に歸されねばならぬ。この變化自體は、金屬の相對的自然的稀少性、ならびに純粹な金屬態で採取されることの難易に依存するであらう。事實において金は、

人間が発見する最初の金屬である。一方では、自然そのものが、金を純粹なる結晶態において、すなはち個別化された、他物と化合されない、鍊金術家流にいへば處女状態において提供し、他方ではまた自然自身が、河川の廣大な洗滌所において金鑛技師の仕事をする。だから人間の方には、川で砂金を採るにしても、沖積層で採掘するにしても、極めて素朴な労働が要求されるだけである。しかるに、銀の採掘は、鑛業の發達および比較的高度の一般的技術を豫想する。この理由からして銀は、その絶對的稀少性は小なるにもかゝらず、その本來の價値は、金のそれに比較して一、二、三、四である。アラビヤのある部族では、十封度の金に對して一封度の鐵が、二封度の金に對して一封度の銀が交換されたといふストラボの説も、かならずしも信じがたくはない。だが、社會的労働の生産諸力が發展し、從つて單純労働の生産物が、結合労働の生産物に比してその價値を高めるのに比例して、また地球の地殼が更にあまねく開發され、金供給の元來の地表的な源泉が涸れるのに比例して、銀の價値は、金の價値との比例において低下してゆくであらう。工^{テクノロギ}藝技術と交通機關との發達の一定段階において、新しき金産地および銀産地の發見は、決定的に秤の分銅を動かしてしまふ。古代アジアにおいては、金の比率は六對一ないし八對一であつた。その後者が、十九世紀の初頭まで支那および日本に行はれた。クセノフォン時代の比率十對一は、古代中期の平均比率と見做しうる。スペインの銀鑛が、初めはカルタゴにより、後にローマによつて開發されたことが、アメリカの金鑛發見が近代ヨーロッパに

與へたと同じやうな影響を、古代に與へた。ローマにおいては、甚だしい銀價の下落がしばしば見られたとはいへ、十五對一ないし十六對一がその帝政時代を通じての、およその平均比例と見られる。それにつゞく中世から現代に達する時代において、金價の相對的の下落にはじまつて銀價の下落にはるところの、同じ運動がくりかへされる。中世紀の平均比率は、クセノフォン時代同様十對一であるが、アメリカ鑛山の發見の結果として、ふた、び十六對一ないし十五對一に變ずる。オーストラリア、カリフォルニア、コロンビアの金産地の發見は、金價値の再三の下落を確からしくする。

(CII) これまでのところ、オーストラリアその他の發見は、金と銀の價値比率にさしたる影響を與へてゐない。これに對するミシユル・シエヴァリエの反對意見は、まづこの、前サン・シモニアンの人の社會主義くらゐのねうちしかない。なるほど、ロンドン市場の銀相場は、一八五〇年—一八五八年の銀の平均金價格が、一八三〇年—一八五〇年時代のそれに比して三パーセントたらず高いことを示してゐる。しかしこの騰貴は、アジアの方面の銀需要によつて簡單に説明される。一八五二年から一八五八年に至るあひだに、銀價格は、たゞ個々の年なり月なりにおけるこのアジアの需要に伴つてのみ變動し、決して新發見産地からの金輸入とともに變動してはをらない。次表がロンドン市場における銀の金價格の概観である。

銀一オンスの價格(單位ペンス)

	三月	七月	十一月
一八五二年	六一 ¹ / ₈	六〇 ¹ / ₄	六一 ⁷ / ₈
一八五三年	六一 ³ / ₈	六一 ¹ / ₂	六一 ⁷ / ₈
一八五四年	六一 ⁷ / ₈	六一 ³ / ₄	六一 ¹ / ₂
一八五五年	六〇 ⁷ / ₈	六一 ¹ / ₂	六〇 ⁷ / ₈

第二章 貨幣または單純流通

一八五六年	六〇	六二 $\frac{1}{4}$	六二 $\frac{1}{8}$
一八五七年	六一 $\frac{3}{4}$	六一 $\frac{5}{8}$	六一 $\frac{1}{2}$
一八五八年	六一 $\frac{5}{8}$		

C 流通要具および貨幣に關する學說史

近代ブルジョア社會の幼年時代たる十六世紀および十七世紀に、普遍的な黄金渴望が、諸國民と諸侯とを、黄金の聖盃を求めて海を越えゆく十字軍に驅りたてた時、近代世界の最初の解釋者たる貨幣主義の創設者らは（重商主義は單に、この貨幣主義の一變種である）、金銀を、すなはち貨幣を、唯一の富として宣言した。正當にも彼らは、ブルジョア社會の天職をいひあらはして、かねをためることにあるとした。すなはち、單純商品流通の見地からして、蠶魚も鏽も腐蝕しえない永遠の財寶を積むことにあるとした。貨幣主義にあつては、價格三ポンドの鐵一トンと、三ポンドの金と同じ大きさの價值量であるといふことに、議論の餘地はない。こゝで問題にされてゐるのは、交換價値の大小ではなく、その適當な形態である。貨幣主義および重商主義が、國際貿易と、直接それに注ぎ入るところの、國民的勞働の特種諸部門とを、富ないし貨幣の唯一の眞源泉として特示したとすると、當時にあつてはなほ、國民的生産の最大部分が封建的諸形態において動き、かつ直接の生存源泉として、生

産者に仕へてゐたことが想はれねばならぬ。生産物の大部分は商品に轉化することなく、従つて貨幣に轉化せず、ひろく一般的社會的質料轉換に入りこむことなく、従つて一般的抽象的勞働の對象化として現はれず、事實において、何らのブルジョアの富を形づくらなかつた。流通の目的物としての貨幣は、富の質料的要素のいかなるものでもなく、生産決定的の生産目的および、生産起動的の生産動機としての交換價値、すなはち抽象的富である。が、いかにもブルジョアの生産の初期にふさはしい事柄として、當時の知られざる豫言者たちは、至純で、明確で、光輝あるところの交換價値の形態を、その形態をあらゆる特種の諸商品との對立における、一般的商品としてかたく握つたのであつた。當時において、本來のブルジョアの經濟部面をなしたものは、商品流通の部面であつた。そこで彼らは、この初等的な經濟部面の觀點から、ブルジョアの生産の錯綜した全過程を判斷し、貨幣を資本と混同したのである。貨幣主義、重商主義に對する近代經濟學者たちの執念ぶかき争ひは、大部分、この體系が、ブルジョアの生産の祕密、それが交換價値によつて支配されることを、野蠻で幼稚な形において饒舌りちらしてゐるといふことに由來する。どこかでリカアドーがいつてゐることに——不當にそれを利用する目的からだといへ——飢饉の時でさへ、國民が飢ゑてゐるから穀物が輸入されるのではなくて、穀物商が儲けるからだ、とある。で、經濟學は、貨幣主義および重商主義の批判においても、それらを難じて單なる錯覺であり、謬まれる理論であるとするだけで、更にそれをば、彼ら自身の根本

的諸前提の野蠻的形態として認識しないことによつて、失敗するものである。それにまたこの體系は、たゞに歴史的な存在権をもつばかりでなく、近代經濟の特定部面にあつても充分なる市民権を有する。富が商品の初等的形態をとるところの、ブルジョアの生産過程のあらゆる段階において、交換價值は初等的な貨幣形態をとるし、また生産過程のあらゆる部面において、富は常に、しばし一般的初等的な商品形態に復歸することをやめない。最も發達したブルジョアの經濟においてさへ、貨幣としての金の銀の特殊の機能——流通要具としての機能とは違つて、自餘のすべての商品との對立において營まれる——は、廢止されるのでなくてたゞ制限されるにすぎない。だから、貨幣中心主義と重商主義がその權利を保有する。金銀は、社會的勞働の直接體現として、従つて抽象的富の存在として、他の神聖ならざる諸商品と對立するといふ舊教的な事實は、當然にブルジョア經濟の新教徒的な誇りを傷つける。そしてブルジョア經濟が、貨幣主義の偏見に陥ることを恐れるのあまり、長いあひだ、貨幣流通の現象に對する判斷力を失つてゐたことは、これから述べるのとほりである。

(一)「金は不可思議な物である！これを所有するものは彼の欲求するすべての物の主人である。人は黄金によつて靈魂をも天國に入らしめうる。」(一五〇三年のロコッパスのジ・マイカからの手紙)「第二版註」「資本論」第一卷、第四版、九五頁。編者」

流通の結晶的生産物としての形態確定においてのみ、貨幣を知れる貨幣主義および重商主義とは反

對に、古典派經濟學が、貨幣をばまづ、その流動的形態において把握したこと、商品轉形それ自體のうちにつくられ、かつ消える交換價值形態として把握したことは、まづたく事の當然であつた。ところで、商品流通はひとへにW-G-Wの形態に於て把握され、この形態はさらに、ひとへに購買の過程的統一の規定において把握されるとなると、貨幣は、貨幣としてのその形態確定を向ふにまはして、流通要具としての形態確定において力説される。流通要具それ自身が、鑄貨としてのその機能において隔離される時、流通要具が價值表章に轉化することは、吾々の見たとほりである。が、古典派經濟學は、まづ、流通の優越形態として金屬流通の前に立つてゐたところから、彼らは金屬貨幣をば鑄貨として把握し、金屬鑄貨をば單なる價值表章として把握する。そこで、價值表章の流通の法則に應當して、商品の價格は流通する貨幣の量に依存し、その反對に、流通する貨幣の量が商品の價格に依存するのではない、といふ命題がうち立てられる。吾々はこの見解が、十七世紀のイタリイ經濟學者にあつては多かれ少かれ暗示され、ロッキによつては或ひは肯定され或ひは否定され、「スペクテーター」誌(一七二一年十月十九日號)、モンテスキュー、およびヒュームによつて決定的に展開されるのを見る。わけでもヒュームは、十八世紀においての、この理論の最重要な代表者であるから、吾々は吾々の概念を彼から始める。

一定の諸前提の下においては、數量における増加または減少は、それが流通する金屬貨幣であれ、

流通する價值表章であれ、等しく、商品價格に影響するやうに見える。諸商品の交換價值が、價格として評價されてゐるその金なり銀なりの價值が騰るが下るかするならば、價格は、その價值尺度の變じがために騰るか下るかするし、價格が騰るか下るかしてゐるために、より多くか、より少くかの金銀が鑄貨として流通する。が、明白なる現象は、商品の交換價值に變化なき場合、流通要具の數量の増減に伴つて生ずる價格の變動である。が、他方においても、流通する價值表章の數量が、その所要の水準點以上あるひは以下に増減することがあれば、それは、商品價格の騰落によつて否應なしにまた、水準點に復歸させられる。この二つの場合は、同一作用が同一の原因によつて惹起されたやうに見え、かく見ゆるところにヒュームは固着するのである。

流通要具の數量と商品の價格運動との關係に關する科學的研究はすべて、貨幣質料の價值を、與へられたものとして前提しなければならぬ。しかるにヒュームは、貴金屬自體の尺度における革命の時期、すなはち價值の尺度における革命の時期のみを、ひとへに考察する。アメリカ鑛山の發見以來の、金屬貨幣の増加と同時に起れる諸商品價格の騰貴は、ヒュームの理論の歴史的背景を形づくり、貨幣主義および重商主義に向つての彼の論戰は、その實際的動機を供してゐる。貴金屬の輸入は、その生産費が同一に止まつてゐても、もちろん増加されうる。が他方において、その價值すなはちその生産に要する労働時間の減少は、まづ、その輸入の増加にのみ示されるであらう。だからヒューム

の祖述者はいふ。減少した貴金屬の價值は、増加した流通要具の數量において示され、増加した流通要具の數量は、騰貴した商品價格において示される、と。だが、事實において價格の騰貴を來たすのは、流通要具としてのではなく商品としての、金銀と交換するために輸出される商品だけである。そこで、今や價值の下落した金銀で評價されるこれらの商品の價格は、自餘の、舊生産費の標準に於いての金銀で交換價值を評價される、すべての商品との比較において騰貴する。かかる同一國における諸商品の交換價值の二重の評價は、當然にただ一時的のものであつた。諸商品の金價格や銀價格は、交換價值自體によつて定まる比例に引き直されて、結局、一切の商品の交換價值が貨幣質料の新價值に従つて評價されることにならねばならぬ。この過程の發展ならびに一般に市場價格の動搖の限界内で、商品の交換價值が自己を押し通すその様式は、ここで扱はるべき問題でない。それにしてもこの平衡化の過程が、ブルジョアの生産の發展の初期にあつては、極めて漸次的で幾つかの長時期を劃して行はれ、しかもどの時期にも、流通現金の増加の速度に追いつけなかつたといふことは、十六世紀における商品價格の運動についての新しい批判的研究によつて、顯著に指摘されてゐるところである。^{三〇}

ヒュームの祖述者らが好んで言及するところの、マセドニア、エジプト、小アジアの征服の結果としての、古代ローマにおける價格騰貴の場合には、まづたく當をえなない。古代世界に特有なる一國から他國への、貯藏財寶の唐突的強力的移送、單なる掠奪過程によつての一國の貴金屬生産費の一时的低減

が、貨幣流通の内在法則を動かさないことは、ローマにおけるエジプトおよびシリアの穀物の無料分配が、穀物価格を支配する一般法則を動かさないと同様である。貨幣流通を細かに観察するために必要な材料、すなはち一方には商品価格の精確な歴史、他方には流通媒介物の膨脹收縮、および貴金屬の輸出入に關する官廳的繼續的統計、等、一般に金融制度の充分なる發展とともに始めて得られる種類のもは、ヒュームならびに十八世紀の他のすべての著者に缺けてゐた。ヒュームの流通理論は次の諸點に要約される。(一)一國における諸商品価格は、そこに存在する貨幣の數量(現實的もしくは象徴的貨幣)によつて決定される。(二)一國に流通する貨幣は、そこに存在するすべての商品を代表する。代表者すなはち貨幣の數量の増加に比例して、代表される物の多かれ少かれが、個々の代表者と同じ數量になる。(三)諸商品が増加すれば、商品の価格が低下するか、もしくは貨幣の價值が騰貴する。貨幣が増加すれば、逆に商品の価格が増大し、貨幣の價值は低下する。

(一) この漸進的なことは、ヒュームの原理と一致しないにもかかはらず彼は承認してゐる。(デザイ、ド・ヒューム「論說集」ロンドン、一七七七年、第一卷、三〇〇頁参照)

(三) ステュアート、前掲書、第一卷、三九四—四〇〇頁。

ヒュームはいふ。「貨幣の夥多なるがためにすべての物が高價なのは、現存商業のいづれにとつても不利益である。何故ならそれは、貧しい國々があらゆる海外市場において、富める國々を賣り負か

すことを許すから。一國だけに限つてみれば、支拂のための鑄貨ないしは商品の代表者が多く存在するか少く存在するかは、善惡を問はず何らの影響も及ぼすことは出来ない。それは恰かも、商人が簿記の記入に際して、字數の少くてすむアラビヤ字計算法の代りに、字數が餘計に要るローマ字計算法を用ひても、帳尻に變りはないとおなじである。しかし、多量の貨幣はローマ式計算數字のやうに不便であり、保管と輸送とにより多く骨が折れる。」一體、少しでも何かを證明するには、ヒュームは、與へられた組織の記數法においては、使用數字の數が數値の大きさに依存するのでなく、逆に、數値の大きさが使用數字の數に依存するといふことを、示さなくてはならないはずであつた。諸商品の價值を、價值の下落した金や銀で評價し、ないしは「勘定すること」に何の利益もないといふのは、まつたくその通りである。それだからこそ諸國民は常に、流通する商品の價值量の増加とともに、銅よりも銀で勘定するのを便とし、銀よりも金でするのを更に便利とした。彼らは、富むに従つてますます價值すくなき金屬を補助鑄貨に、價值多き金屬を貨幣に轉化する。他方でまたヒュームは、金や銀で價值を數へるためには金も銀も「手許に」あるを要しないといふことを忘れてゐる。彼にあつては計算貨幣と流通要具とが同じものになり、兩方とも鑄貨(Coin)である。價值の尺度の、ないしは計算貨幣として機能する貴金屬の價值變動は、商品価格を高め或ひは低めるから、従つてまた流通速度が不變の場合には、流通する貨幣の總量をも増しまたは減らすから、だから諸商品價格の騰落は流通する貨

幣の量に依存する、とヒュームは結論する。十六世紀および十七世紀において、金銀の量が増加したばかりでなく、同時にその生産費が減少したことを、ヒュームはヨーロッパ諸嶺山の閉鎖から知ることが出来た。十六世紀および十七世紀には、ヨーロッパの諸商品価格は、アメリカから輸入される金銀の量の増加とともに騰貴した。すなはち各國における諸商品価格は、その國に存在する金銀の量によつて決定されてゐる。これがヒュームの第一の「必然の結果」であつた。十六世紀および十七世紀には、価格は、貴金屬の増加と同様には騰貴せず、商品価格に少しでも變化が現はれるまでには、半世紀以上も経過し、そしてそれからさへ、商品の交換價值が一般に下落した金銀價值に従つて評價されるまでには、すなはち一般的商品価格に革命が起るまでには、まだよほど間があつた。そこでヒュームは、彼の哲學の根本原理と全く反對に、一面的に觀察された事實を無批判的に一般的命題に轉化し、結論していふには、商品の價格もしくは貨幣の價值は、一國に存在する貨幣の絶對的數量によつては決定されずして、むしろ實際に流通に入りこんでゐる金銀の量によつて決定されるが、しかし一國に存在する金銀は、すべて結局は鑄貨として流通に吸収されずにはをらない、と。もし金銀がそれ自身價值をもつなら、自餘の流通の法則はすべて度外視するとして、諸商品の價值の一定總額に對しては、金銀の一定量のみが流通しうることは明らかである。従つてもし一國內に偶然的に存在する金銀の量が、諸商品價值の總額にかかはるところなく、流通要具として商品交換に入りこまねばならない

ものなら、金銀は何らの内在價值をもたず、従つて事實において實際の商品でないのである。これがヒュームの第三の「必然の結果」である。價格なき商品、價值なき金銀、それを彼は流通過程に入りこませる。だから彼は決して、商品の價值のことも金の價值のこともいはず、たゞそれらの相互的數量のことをいふだけである。夙にロックは、金銀は單に想像された價值ないしは因襲的價值をもつにすぎないといつてゐた。これこそは、金銀のみが眞の價值をもつといふ貨幣主義の主張に對する、最初の粗野な對立形態である。金銀の貨幣存在が、單に社會的交換過程における金銀の機能から生ずるといふことが、金銀は自己の價值を、従つてその價值の大きさを、社會的機能に負ふのだといふ風に解釋される。金銀はすなはち價值なき物であるが、しかし流通過程内で、彼らは商品の代表者として擬制的價值を享ける。流通過程によつて、彼らは貨幣に轉化されるのではなくて、價值に轉化される。この彼らの價值は、彼ら自身の數量と商品の數量との比率によつて定まる。二つの數量は平衡を得ねばならないからである。かくてヒュームは、金銀を非商品として商品世界に入りこませると同時に、一方、金銀が鑄貨の形態確定において現はれるやいなや、逆に彼は金銀をば、單純交易によつて他商品と交換される單なる商品に轉化させる。で、いま商品世界が、ただ一種の商品たとへば百萬クォーターの穀物からなつてゐるものとしたら、そこにもし二百萬オンスの金があれば、一クォーターの穀物は二オンスの金と交換され、二千萬オンスの金があれば二十オンスの金と交換され、商品の價格と

貨幣の價值とが現存の金量と逆比例して騰落する、といふ道理はしごく單純であらう。だが、商品世界は限りなく異なる使用價值からなり、それらの相對的價值は、決してそれらの相對的數量によつては決定されない。では、ヒュームはこの商品の量と金の量との間の交換を、どう考へてゐるか？ 商品總量の可除部分としての各商品が、それに相當する金量の可除部分と交換されるといふ、いひやうもなく鈍い思想で彼は満足する。で、諸商品の過程的運動、すなはちそれらに含まれる交換價值と使用價值との對立から發生し、貨幣の流通に現はれ、貨幣の種々なる形態確定に結晶するところのその運動は、かくして抹殺され、それに代つて、一國に存在する貴金屬の重量と同時に存在する商品量との、想像的機械的な平衡化が現はれるのである。

(四) デヴィッド・ヒューム、前掲書、三〇〇頁。

(五) 同上、三〇三頁。

(六) 同上、三〇三頁。

(七) 「諸價格が、一國における商品の絕對量および貨幣の絕對量に依存するといふよりは、市場に現はれうるないしは現はれるでもあらう商品の絕對量、および流通する貨幣の絕對量に依存することは明らかである。もし鑄貨が萬能に藏ひこんであれば、價格に關してはそれは毀滅されたのと同じである。商品が倉庫や穀倉に貯藏されてあつても同一結果が生ずる。これらの場合には貨幣と商品とは決して相會ふことがないから、お互ひに影響し合ふことが出來ない。(價格の)全體は結局、王國內にある貨幣の新しい數量との正しき比率に連する。」(同上、三〇三、三〇七、三〇八頁)

(八) 金銀が貨幣としての機能から獲得するはずの餘剩價值に關するロウおよびフランクリンの説を参照。またフルボネイをも「第二版註」。

(九) モンテスキューにあつては「この機制が文字通りにいひあらはされてゐる。」(第二版註。モンテスキューのこの言葉は「資本論」第一卷、第一篇、註八〇。第四版、八八頁に引用されてゐる。編者)

サー・ジェームス・ステュアートは、ヒュームおよびモンテスキューに對する精細な批判をもつて、鑄貨と貨幣とに關する彼の研究の筆を起す。事實において彼は、流通する貨幣の量が商品價格によつて決定されるか、それとも商品價格が流通する貨幣の量によつて決定されるか、といふ問題を提出した最初の人である。彼の説明は、價值尺度に關する荒唐な見解や、交換價值一般に關する動搖的な表述のために濁るとはいへ、彼は、諸商品と貨幣とを機械的に分離させることをせず、事實に即して、商品交換の種々なる要因そのものから種々なる機能を展開するが故に、貨幣の本質的な諸形態確定と貨幣流通の一般的諸法則とを發見する。彼はいふ。「内國的流通にあつての貨幣の用途は、借りになつてゐるものの支拂と、必要とするものの購買との二大目的に總括することが出來、兩者を總括したものが現金の需要 (ready money demands) を形づくる……一國民の産業および貿易の状態、生活の様式、慣習的支出のすべて總括されたものが、貨幣の需要の大小すなはち讓渡の數量を支配し、決定する。この凡百の支拂を完行するためには、一定の割合の貨幣を必要とする。この割合はさらに、讓渡の數量は不變でも、諸般の事情に應じて或ひは増加し、或ひは減少することが出來る……が、いかなる場合でも一國の流通は、一定量の貨幣を吸収しうるにすぎない。」(同上)。「商品の市場價格は、一國に存する金

貨の量に決してかかはるのでないところの、需要と競争との複雑な働きによつて決定され、後者は、一國に存する金銀の量には全然かかはるところがない。では、鑄貨として要求されない部分の金貨は、どうなるか？ それは退藏貨幣として蓄積されるか、ないしは奢侈品の材料として製作される。金銀の量が流通に要する量の水準以下に降れば、人はそれを象徴的貨幣その他の代用物で補足する。有利な爲替相場が、一國に貨幣の剰餘をもち來たすと同時に海外送付の必要を絶つ場合には、貨幣はしばしば金庫の中にはまりこみ、鑛脈の中に寝てゐる時と同じやうに、何の效力も發揮しない。⁽¹¹⁰⁾ ステュアートによつて發見された第二の法則は、信用にもとづく流通の、その出發點への回流である。最後に彼は、異なる國々における利子歩合の相違が、貴金屬の國際的移出入の上に及ぼす諸作用を展開してゐる。この最後の兩規定は、吾々の單純流通のテーマとはかけはなれた問題であるから、こゝではたゞ完全を期するために言及しておくに止める。⁽¹¹¹⁾ 象徴貨幣もしくは信用貨幣——ステュアートは、貨幣のこの二形態をまだ區別してゐない——は、內國的流通における購買要具もしくは支拂要具としての貴金屬にとつて代ることは出来るが、しかし世界市場では決して出来ない。紙幣はだから、社會の貨幣 (money of the society) である。しかるに金貨は世界の貨幣 (money of the world) である。⁽¹¹²⁾

(110) ステュアート、前掲書、第一卷、三九四頁以下。

(111) 同上、第二卷、三七七—三七九頁、散見。

(112) 同上、三七九—三八〇頁、散見。

(113) 餘分の鑄貨は貯藏されるかまたは板金にされてしまふ。……紙幣はといふに、それを借りた人の需要を充たすといふ第一の目的を果すやいなや、その債務者の手に戻つて實現される。……だから、一國の正金をどんな大きな割合でも増減させてみるがよい、商品の價格は需要と競争の諸原理に従つて騰落するであらうし、そして後者は常に給付しうる財産または何らかの等價物を所有する人々の意圖にこそ依存すれ、彼らが所有する鑄貨の量には決して依存しないであらう。……それ(すなはち一國の正貨の量)がどんなに少からうと、その國にどんな名目によつて眞實の財産があり、それを消費せんとする競争が所有者のあひだにあるかぎり、諸價格は、物々交換や象徴貨幣や相互給付やその他の無數の工夫のおかげで、騰貴するであらう。……もしこの國が他國と通商してゐれば、その國にある多種の商品の價格と他國にあるそれらとの間にはある比例がなければならず、従つて正金の急激なる増加または減少は、たとへそれ自身で諸價格を騰落させる作用を営みえたとしても、その作用は外國の競争によつて制縛されるであらう。〔同書、第一卷、四〇〇—四〇二頁。〕あらゆる國の流通は、市場に出る商品を生産するところの、その住民の生産物に比例してはならぬ。……だからもし、一國の鑄貨が市場へ出される生産物の諸價格の比例以下に低減するならば、鑄貨の對當物を供給するために象徴的貨幣のやうな工夫物が現はれて來よう。が、もし正貨が生産物の比例以上に増大するとしても、それは諸價格を騰貴させる効果もなければ流通に入りこみもしないであらう。それは退藏貨幣として貯藏されるであらう。……一國の貨幣の量が何程であらうとも、その國が世界の他國と交通してゐる以上、流通内に留まるところの貨幣の量は、富者の消費と貧者の勞働および勤勉にほぼ比例したものにすぎず、決してそれ以上でも以下でもありえない。』そしてこの比例は「實際にその國に存在する貨幣の量によつて」は決定されぬ(同上、四〇三—四〇八頁、散見)。「すなはち國民は、彼ら自身の流通に必然でない現金は、出来るだけこれを自國に比して金利の高い國へ投下することに努めるであらう。〔同書、第二卷、五頁。〕ヨーロッパにおいて最も富む國民は、流通する正金において最も貧しい國であることもある。〔同上、六頁。ステュアートに對するア・サ・ヤングの論難を見よ。〕」〔第二版註。〕「資本論」第一卷、第一篇、註七八。第四版、八七頁においてマルクスはいふ。ア・サ・ヤングは、その著「政治算術」(ロンドン、一七七四年)において、ヒュームの理論を、ジェームス・ステュアートの批評に對して擁護してをり、同書には「價格は貨幣の量に依存する」(一二二頁以下)といふ特別の一章がある、と、編者」

(114) ステュアート、前掲書、第二卷、三七〇頁。ルイ・ブランは、內國的、國民的貨幣にはかならない「社會の貨幣」を、社會主義貨幣と翻譯してゐるが、これは完全に無意味なことで、結局ジャン・ロウを社會主義者にするものである。(彼の「フ

フランス革命史」の第一巻を見よ。

自分自身の歴史をいつも忘れてゐるといふことは、歴史法學派がいふ意味での「歴史的」發展を有する諸國民の特徴である。で、諸商品價格と流通要具の數量との關係についての論争は、この半世紀のあひだ絶えずイギリス議會を騒がせ、大小幾千のパンフレットの發行をさへ見てゐるにもかかはらず、彼ステュアート^(一五)の存在に至つては、レッシング時代のモーゼス・メンデルズゾーンにとつてスピノザが「死んだ犬」であつたのよりも、もつとひどい「死んだ犬」であつた。「通貨」の歴史の最近の著者マクラーレンですら、アダム・スミス^(一五)をステュアート説の創設者に變じ、リカアード^(一五)をヒューム説のそれに變じてゐる。ところが、リカアードはヒュームの學説を精化した^(一五)が、アダム・スミスは、ステュアートの研究の成果を死んだ事實として記録する。アダム・スミスは、「僅かでも儲けておくとたくさん儲けるのがたやすくなることが多い」といふスコットランドの諺を、精神的の富にも應用するところから、事實において彼が澤山なものにするところの、その僅かなものを引き出して來る源泉を、彼は小心翼翼として隠蔽する。一度ならず彼は、明確に規定することが彼をして、彼の先行者らとの清算を餘儀なくさせさうになる場合には、むしろ論點から離れ去ることを選んでゐる。貨幣理論においてもさうである。彼が、一國に存在する金貨は、一部は鑄貨として用ひられ、一部は、銀行のない國では商人のための準備金として、信用流通のある國では銀行預金として蓄積され、一部は國際貨

借決済のための退藏貨幣として役立ち、一部は奢侈品に製作されると述べてゐる時、彼はだまつてステュアートの説をとるものである。流通する鑄貨の數量に關する問題になると、彼は全然不當に、貨幣を單なる商品として扱ふことによつて、だまつてそれを片づける。スミスを俗學化する男、鈍物、ジャン・パティ、スト・セイは、かのヨハン・クリストフ・ゴットシェットが彼のシェナイヒをホームアと呼び、自分自身をピエトロ・アレティノと呼んで、「主たる怖れ」と「世界の光」だらしめてゐるやうな風に、フランス人からは「科學のプリンス」と呼ばれてゐるが、このセイは、アダム・スミスのこの必ずしも無邪氣などはいへない過誤を、ひどく勿體ぶつて教理に祭りあげた。それにまた、アダム・スミスの信用貨幣に關する見解は獨創的でふかいとはいへ、彼の重商主義の錯覺に對する論争的なところは、彼に、金屬流通の諸現象の客觀的把握を妨げてゐる。十八世紀の種々なる化石理論には、大洪水についての聖書の傳統に對する、批判的ないし辯解的關心から流れでた暖流が貫いてゐるやうに、十八世紀のあらゆる貨幣理論の背後には、貨幣主義すなはちブルジョア經濟の搖籃を護りつつ、立法の上に絶えずその陰影を投げてゐた亡靈との祕密の闘ひが匿されてゐる。

(一五) マクラーレン、前掲書、四三頁以下。早世したドイツの一學者(グスターフ・ユリウス)の愛國心が、彼を、老アッシュは、リカアード學派と對峙する權威であると思はせた。名譽あるアッシュは、ステュアートの天才的な英語をハンブルグの方言に移し、彼の原本を出来るだけ改悪した。

(一六) これは正確でない。アダム・スミスはむしろ二三の箇所正當にこの法則を述べてゐる。「第二版註。これについて

は「資本論」第一巻、第一篇、註七八。第四版、八七頁参照。編者」
(一七) だから「通貨」と「貨幣」との差異、すなはち流通要具と貨幣との差異は、「諸國民の富」の中にはない。アダム・スミスは、ヒューム、ステュアートをまことによく知つてゐたのだが、彼は外観上、それに囚はれてゐないのに欺かれて、わが賢明なるマクラーレンは、かういつてゐる。「諸價格は通貨の程度に依存するとの理論は、當時まだ世間の注意を惹かなかつた。で、ドクトル・スミスは、ロック氏と同様（だがロックはその見解が變つてゆく。——著者）、金屬貨幣は商品に外ならないと考へてゐる。」（マクラーレン、前掲書、四四頁）

十九世紀においては、貨幣の本質に關する諸研究は、直接に金屬流通の諸現象からではなく、むしろ銀行紙幣流通のそれらから刺激を受けてゐた。金屬流通の方は、ただ銀行紙幣流通の法則を發見せんがために、想起されたにすぎない。一七九七年來のイングランド銀行の正貨支拂の停止、その後起つた多數商品の價格の騰貴、とくに一八〇九年以來、金の鑄貨價格が市場價格以下に下落したること、銀行紙幣の減價、これらはみな直接に、議會内における政黨戦および議會外における理論戦の實際的機會を供し、そのいづれもが熱してゐた。十八世紀における紙幣の歴史は、この論争の歴史的背景として役立つ。ロウ銀行の失敗、十八世紀の初頭から中葉にかけて、北米の英國植民地の地方銀行紙幣が價值表章の數量増加に伴つて減價したこと、さらにその後、獨立戦争中にアメリカ政府が法貨として發行した紙幣(Continental bills)、最後に、一そう大仕掛けであつたフランス革命當時のアシニア紙幣の經驗、等がそれである。當時のイギリスの多くの著者は、價值表章ないしは強制通用力ある國家紙幣の流通と、それとは全く別の法則によつて規定される銀行紙幣流通とを混同してゐる。そし

て彼らはこの強制流通の現象を、金屬流通の法則から説明すると稱しながら、事實は逆に金屬流通の法則を強制流通の現象からひき出してゐる。吾々は、一八〇〇年から一八〇九年にいたる期間に書いた多數の著者をすべて飛ばして、直ちにリカアドーに行かうと思ふ。けだし彼こそは、彼の先行者らを總括して彼らの見解をより尖鋭に定式化した者であり、また彼が貨幣理論に與へた態様は、今日にいたるまでイギリスの銀行法規を支配してゐるからである。リカアドーもまた彼の先行者らと同様、銀行紙幣ないし信用貨幣の流通と、單なる價值表章の流通とを混交する。最も彼を支配した事實は、紙幣の減價と同時に生ずる商品價格の騰貴である。ヒュームにとつてのアメリカの鑛山は、リカアドーにあつてはスレッド・ヒール街の紙幣印刷所であつた。そしてある個所では彼自身、言明的にこの二要因を同一視してゐる。彼の最初の諸著はもつぱら貨幣問題のみを扱つたものであるが、それは、國務大臣と主戰黨とを味方とするイングランド銀行と、議會における反對黨たるホイッグ黨と平和黨とを周圍に集めたイングランド銀行反對者との論争が、最も激烈を極めた頃に發表された。これらの著作は、有名なる一八一〇年の地金委員會の報告書の直接の先驅として現はれ、リカアドーの諸見解はこの報告に採用されてゐる。貨幣を單なる價值表章として説明するリカアドーおよびその一派が、地金主義者(Bullionists)と呼ばれる特異な事態は、この委員會の名稱のためばかりではなく、リカアドーの理論内容そのものためでもある。經濟學に關する彼の著作において、リカアドーは、同じ見解

を反覆しかつ一段と發展させてはゐるが、しかし交換價值、利潤、地代等についてのそのやうな、貨幣そのものの本質に對する考究はどこにもこれを試みてをらない。

(一八) デザイッド・リカアドー「地金の價格騰貴、銀行紙幣の減價の一證左」第四版、ロンドン、一八一一年。(初版は一八〇九年に現はれた)。さらに「地金委員會の報告に關するボザンケ氏の實際的諸考察に答ふ」ロンドン、一八一一年。

リカアドーはまづ、金銀の價值を、他のすべての商品の價值同様、それに對象化された勞働時間の量によつて決定する^(一九)。一定價值の商品としての金銀によつて、他のすべての商品の價值は量られる^(二〇)。一國における流通要具の量は、そこで、一方では貨幣の尺度單位の價值によつて、他方では商品の交換價值の總量によつて決定される。この量は、支拂方法上の經濟によつて修正される^(二一)。一定價值の貨幣の流通しうる數量がかく決定されてあつて、そして流通内における貨幣の價值はその量においてのみ表はれるのだから、貨幣の單なる價值表章は、もし貨幣の價值によつて決定された割合で發行されるなら、流通において貨幣に代位することが出来る。そしてまた「通用する貨幣は、そのすべてが代表すべきは金のと等價值なる紙幣のみからなる時に、最も完全な状態にある^(二二)」で、ここまではリカアドーは、貨幣の價值を與へられたものとして前提しつつ、流通要具の量を商品の價格によつて決定する。そして價值表章としての貨幣は、彼には特定量の金の表章を意味し、ヒュームにおけるやうに單なる無價值なる、商品の代表物ではない。

(一九) デザイッド・リカアドー「經濟學原理」七七頁。「貴金屬の價值は、結局、他のすべての商品の價值同様、それを獲得して市場にもち來たすのに要する金勞働量に依存する。」

(二〇) 同上、七七、一八〇、一八一頁。

(二一) リカアドー、同上、四二二頁。「一國において使用されうる貨幣の數量は、その價值に依存する。金のみが流通してゐるなら、銀のみが使用されてゐる場合の十五分の一で足るであらう。」また、リカアドーの「經濟的で安全な通貨についての提案」(ロンドン、一八一六年、一七、一八頁)を見よ。それにおいて彼は「流通する紙幣の數量は、それがその國の流通にとつて必要とされる數量に依存する。そして後者は、貨幣の尺度單位の價值、支拂の總額およびそれを行ふ際に工夫される經濟によつて決定される。」

(二二) リカアドー「經濟學原理」四二三、四三三頁。

リカアドーは、不意に、彼の論述の本道からはづれて反對の見解をとる。その際に、彼はいきなり貴金屬の國際的流通に轉じ、主題とはまるでかかはりない諸考慮をもちこんで、問題を混亂に陥し、吾々はいま、リカアドー自身の思考の行程を辿ることにし、一切の人爲的偶然的事項を取り除くために、まづ、貴金屬が貨幣として流通する國の内部に金銀鑛が存在するものと假定する。ここまでのリカアドーの論究から生ずる唯一の命題は、金の價值が與へられてゐる時、流通する貨幣の量は、商品價格によつて決定される、といふことである。で、一定の時において一國に流通する金の量は、單純に、流通する商品の交換價值によつて決定される。いま、より少量の商品が在來の交換價值で生産されるといふ理由か、もしくは、勞働の生産力の増大の結果として同一商品量がより、すくない交換價值をもつといふ理由かによつて、流通する商品の交換價值の總量が減少したと假定する。ないしは反

對に、生産費が従前通りであるのに商品の量が増加したといふ理由か、もしくは、同一量ないしはより少量の商品の價值が、勞働の生産力の増大の結果増加したといふ理由かによつて、交換價值の總量が増加したと假定する。この二つの場合に、流通しつゝある一定量の金屬はどういふことになるのか？もし金が、流通要具として通用するが故にのみ貨幣であるのなら、もし金が、國家の發行した強制通用力ある紙幣のやうに流通内に留まらざるをえないのなら、（そしてそれが、リカアドーの頭の中にあつたことだ）、さうならば、流通する貨幣の量は、第一の場合には、金屬の交換價值に比例してその正常の水準以上に上り、後の場合にはその水準以下に下るであらう。だから金は、それ自身の價值をもつてはゐても、第一の場合には自己の交換價值よりも低い交換價值の金屬の表章になり、第二の場合にはより高い價值の金屬の表章になる。第一の場合には金はその實價以下の價值表章として、第二の場合には實價以上の價值表章として残るであらう（再び強制通用紙幣からの抽象）。第一の場合には、あたかも商品が金以下の價值の金屬で評價されたのと同じことであり、第二の場合には、金以上の價值の金屬で評價されたのと同じことであらう。従つて、第一の場合には商品價格が騰貴し、第二の場合には商品價格が低落するであらう。この二つの場合のいづれにあつても、商品價格の運動すなはちその騰落は、流通する金の數量が、それ自身の價值に相應する水準以上または以下に、すなはちそれ自身の價值と流通する商品の價值との比率によつて決定される常態的數量以上または以下に、相對的に膨脹または

收縮することの結果として現はれるであらう。

同じ過程は次のごとき場合にも生ずるであらう。すなはち、流通する商品の價格總額の方は不變であるが、しかし、流通する金の數量の方が正當の水準以下あるひは以上になる場合である。以下になるのは、流通において磨滅された金鑄貨が、それに相當する鑛山からの新生産物によつて補はれない時、以上になるのは、鑛山からの新供給が流通の需要を超過する時である。が、いづれの場合にせよ、金の生産費すなはち金の價值は不變なることに假定してある。

以上を要約すると、諸商品の交換價值が一定せる場合には、流通する貨幣は、それ自身の金屬價值によつてその數量が決定されてある時に、正常の水準にある。それは、諸商品の交換價值の總量が減少するか、もしくは鑛山からの金の供給が増加するがために水準以上に上り、そして金はそれ自身の金屬價值以下に下り、諸商品の價格は騰貴する。それはまた、諸商品の交換價值の總量が増加するかもしくは、鑛山からの金の供給が磨滅した金の量を補ふに足らないために、その正常の水準以下に收縮し、そして金はそれ自身の金屬價值以上に上り、諸商品の價格は下落する。この二つの場合においては、流通する金は、それが實際にふくむ價值以上か以下かの價值表章である。彼は、増價した自身の表章にもなれるし、減價した自身の表章にもなれる。諸商品が一般に、貨幣のこの新しき價值で評價されて、そして一般商品價格が、それに應じて騰貴しまたは低落するやいなや、流通する金の量は、

再び流通の要求に應當するものになるであらう（かかる結果になるといふことは、リカードがとくに愉快がつて高調するところである）が、しかしそれは貴金屬の生産費とは背馳し、従つてまた、商品としてのそれらと他の諸商品との關係とも背馳するであらう。交換價值一般に關するリカードの理論に従つて、金がその交換價值、すなはち金に含まれる勞働時間によつて決定される價值以上に騰貴することは、金の生産増加を惹起し、その増大した供給が、騰貴した金を再びその正當の價值まで引き下げるであらう。反對に、金がその價值以下に低下することは金の生産減少を惹起し、遂に再びその正當の價值まで引き上げる。かかる反對の運動によつて、金の金屬價值とその流通要具としての價值との間の矛盾は除去されるであらう。流通する金量の正當な水準が回復され、諸商品價格の高さは再び、價值尺度に應當するものとならう。流通する金の價值のかかる變動は、地金形態の金にも同じやうに影響するであらう。假定によつて、奢侈品に利用されない金はすべて、流通してゐることになつてゐるからである。金そのものは、鑄貨としてであれ、地金としてであれ、彼自身の價值より以上または以下の金屬價值の價值表章になりうるのだから、流通する兌換銀行紙幣が同じ運命を頰たねばならぬことは自明である。銀行紙幣の兌換が維持され、その實質價值と名目價值が一致してゐるとしても、流通する貨幣すなはち金と紙幣との總額（金屬と兌換紙幣とからなる總通貨）は、その總數量が上記の諸原因から、流通する商品の交換價值と、金の金屬價值とによつて決定される水準以上のほり、ま

たは以下にくだるに従つて、或ひは増價し或ひは減價する。不換紙幣は、この見地からすれば、兌換紙幣に比して、それが二重に減價しうるといふ長所をもつだけである。不換紙幣は、發行高が多きに失したために、それが代表するはずの金屬の價值以下に下落することもあり、またそれによつて代表される金屬の方が、自身の價值以下に下落することのためにもある。この後の方の減價、すなはち金に對する紙幣の減價ではなくて、金と紙幣とを一緒にしたものの減價、ないしは一國の流通要具總體の減價なるものは、リカードの發見の主要なものであつて、ロイド・オヴァーストーンとその一黨のお役に立ち、一八四四年および一八四五年の、サー・ロバート・ピールの銀行立法の根本原則とされたものである。

リカードによつて證明されなければならなかつたのは、商品の價格もしくは金の價值は、流通する金の數量に依存するといふことであつた。この證明は、證明するべきことを前提するところにある。すなはち、貨幣として用立つてゐる貴金屬は、いかなる量においてでも、流通要具すなはち鑄貨となくはならず、さうなることによつてまた、流通する諸商品の價值表章とならなくてはならぬ——それが貴金屬自身の内在價值に對するいかなる比例においてであらうと、また流通する諸商品の總價值がいかなる大きさのものであらうと——といふことを、前提するところにある。別な言葉でいへば、この證明は、貨幣が流通要具としてのその機能以外におこなふ他のあらゆる機能を、抽象し去るこ

とに存する。たとへばボザンケとの論争においてのやうに、激しく急所をつかれる時には、數量のせいで減價した價值表章の現象のために眼のくらんでゐるリカアドーは、獨斷的確言に逃げてしまつてゐる。

(二三) デザッド・リカアドー「ボザンケ氏に答ふ」前掲書、四九頁。「商品は、貨幣の増減に比例して價格が騰落する。私はこれを争ひの餘地ない事實と見做す。」

リカアドーがもし、具體的な諸事實や、問題自體からそれてゐる附隨的な諸點やをとり入れることなく、吾々が以上においてしたやうに、抽象的にこの理論を立ててゐたのならば、その空虚さがまざまざと見えただけである。が、彼は全論述を國際的に色づけてゐる。

だが、その規模の外觀的壯大が、基礎觀念の貧弱さを少しも變じないことは、たやすく證明されるであらう。

で、第一の命題はかうであつた。流通する金屬貨幣の量は、それが、流通する金屬貨幣自身の金屬價值で評價されたる、流通する商品の價值總量によつて決定されたものであれば、正常である。これを國際的に表現していへば、流通の正常状態において各國は、その富とその産業とに相應する貨幣量をもつてゐる。貨幣は、その實價もしくはその生産費に相應する價值において流通する。すなはち、貨幣は、すべての國において同一價值をもつ。この場合には従つて、貨幣が一國から他國へ輸出または

輸入されることはないであらう。かくして、種々なる國の通貨(流通する貨幣の總量)の間に平衡が生ずるであらう。で、國民的通貨の正常な水準は、いまや通貨の國際的平衡として表現されるのであつて、そして事實においては、國民性は一般的經濟法則を少しも變じない、といふことがいはれてゐるまでである。ここで吾々は、再び前同様の致命點に到達してゐる。いかにして正常な水準がみだされるのであるか? といふことを今度のいひ方でいへば、いかにして通貨の國際的平衡がみだされるのであるか? ないしは、いかにして貨幣は、すべての國で同一價值をもたなくなるのか? ないしは最後に、いかにして貨幣は、各國においてそれ自身の價值をもたないやうになるのか? 前の見方からすれば、正常な水準は、商品の價值量が同一であつても、流通する貨幣の量が増減するがためか、もしくは流通する貨幣の量は同一であつても、商品の交換價值が増減するがために動搖した。と同じやうに今度は、金屬の價值そのものによつて決定された國際的水準は、一國に存在する金の量が、國內における金鑛山の新發見によつて増加したためか、もしくは、どれかの特定の國において、流通する商品の交換價值の總量が増減したがために動搖する。前には一國の通貨を縮小しまたは膨脹させ、それに應じて、商品價格を下落させまたは騰貴させることの必要なるに従つて、貴金屬の生産が減少しまたは増加したやうに、今度は、一國から他國への輸出と輸入とがその働きをする。價格が騰貴し、金の價值が流通膨脹のためにその金屬價值以下に低下してゐる國では、金は他國に比して價值を減じ、そ

の結果、諸商品の価格は他國に比して騰貴するであらう。そこで金は輸出され、商品が輸入される。これと反対の場合には反対の結果になる。前の場合には金の生産であつたが、今度は金の輸出および輸入と、そしてそれに伴ふ商品価格の騰貴ないしは低落が繼續して、遂には、前の場合に金屬と諸商品との正當な價值比例を回復したのと同じやうに、いまや國際的通貨のあひだの平衡を回復するに至るであらう。前の場合には、金はその價值以上あるひは以下にあるがために、金の生産が増加しまたは減少したのだが、同じ理由のために今度は、金の國際的移動が起るまでのことである。前の場合に、金の生産のあらゆる變動が流通する金屬の量を動かし、それとともに價格を動かしたやうに、同じ働きを今度は國際的輸出入がすることにならう。金と商品との相對的價值、ないしは流通要具の正當量が回復されるとともに、前の場合にはもはやそれ以上の生産を見なくなつたし、今の場合ではもはやそれ以上なんらの輸出入を見ないことにならう。ただし、磨滅した鑄貨を補ひ、奢侈品製作の要求を充たすための金銀は除外してのことである。そこで、かういふことにならねばならぬ——「商品の等價物として金を輸出せんとする企て、すなはちいはゆる不利なる貿易なるものは、流通要具の數量の過度の膨脹の結果としての外は、決して起りえない。」^(二七)金屬の輸入または輸出をひき起すものは常に、流通要具の數量が、その正當水準以上または以下に膨脹または收縮する結果として生ずる、金屬の増價または減價である。^(二八)更にまたかういふことにもなる。すなはち、第一の場合に金の生産が増減し、第二の場合に

金の輸入されまたは輸出されるのは、ただ、金の量がその正當水準以上または以下になり、そして金はその金屬價值以上または以下に増價または減價する時にかぎり、すなはち、商品價格が高すぎるか低すぎるかする時にかぎりであるから、金生産の増減および金の輸出入の運動は、流通する貨幣の膨脹なり收縮なりによつて、諸價格をして、再びその眞の水準を回復せしめることによつて、すなはち第一の場合には金價值と商品價值とのあひだの水準を、第二の場合には通貨の國際的水準を回復せしめることによつて、矯正手段たるの働きをする。これをいひ換へれば、貨幣は、各國でそれが鑄貨として流通するかぎりでのみ、種々なる國に流通する。貨幣とは鑄貨にほかならず、従つて一國に存在する金はすべて流通に入りこまねばならず、すなはち彼自身の價值表章として、自身の價值以上または以下に騰落しうるものである。で、かくして吾々は、この國際的錯綜の迂路を経て、仕合せにもまた出發點をなすところの單純なドグマに到達した。^(二九)

(二四) デヴィッド・リカード「地金の騰貴……」。貨幣はすべての國において同一價值をもつてあらう。(四頁)。リカードは彼の經濟學においてこの定則を修正してはゐるが、しかしここに述べたところを動かすやうな仕方においてはなない。

(二五) 同上、三一—四頁。

(二六) 同上、四頁。

(二七) 「不利なる貿易は過多なる通貨以外の原因からは決して起らなす。」(同上、一一、一二頁)

(二八) 「鑄貨の輸出はそれが廉いことに起因する。それは不利なる貿易の結果ではなくて原因である。」(同上、一四頁)

(二九) 同上、一七頁。

いかにリカアドーが、現實の諸現象を暴力的に折りまげて、自己の抽象的理論の目的にそふやうに説明したかは、二三の實例が示すであらう。たとへば一八〇〇年から一八二〇年にかけて、英國にしばしば穀物不作のあつた當時に、リカアドーは、金が輸出されるのはその需要があるからでなく、またそれが、貨幣すなはち世界市場で絶えず作用する購買要具および支拂要具であるからでもなくて、金が他種の商品に比して減價し、従つて不作の國の通貨が、他國の通貨に比して減價してゐるからである、と主張した。すなはち凶作が流通する商品の量を減少させたから、與へられた量の流通貨幣はいまやその正常の水準以上に上り、従つてすべての商品價格が騰貴してゐるといふのである。この逆説的な解釋とは反對に、次のことが統計的に證明された。一七九三年から最近時に至るまで、英國に不作の起つた場合には、流通要具の現在量は過多とはならずして却つて過少になり、従つて以前よりもより多くの貨幣が流通し、また流通せねばならなかつたことが、統計的に證明されてゐる。^(三〇)

(三〇) リカアドー、上掲書、七四、七五頁。「英國は、不作の結果、その商品の一部を奪ひ去られ、従つて以前よりも少い數量の流通要具を必要とするやうな國の場合と同じことになる。以前には國の諸支拂と等しき量にあつた通貨は、いまや過剰を來たし、その減少した生産に比して相對的に安くなる。従つて通貨の輸出は、他の諸國の通貨の價值に對して自國通貨の價值を回復するであらう。」彼における貨幣と商品との混同、および貨幣と鑄貨との混同が、次の文句をかくし現はれてゐる。「不作のうち、英國が異常な穀物輸入の機會に面してゐる時に、他の一國が穀物の餘利を有してゐながら、他のいかなる商品にも需要を感じてゐない」と假定しうるならば、かかる場合には疑ひもなくその國は、商品と交換するためその穀物を輸出しはしないであらう。が、また貨幣と引き換へるためにも輸出しないであらう。なぜなら貨幣なるものは、いかなる國でも絶對的に欲するとこ

ろの商品ではなく、ただ相對的にのみ欲するものであるから。(同上、七五頁)。ブーシキンは、その英雄時の中で、英雄の父を、諸商品が貨幣であるといふことを悟りえない人間にしてゐる。が、貨幣が一つの商品であることは、すべてのロシア人は疾く承知してゐた。それは一八三八年—一八四二年のイギリスの穀物輸入が證示してゐるのみならず、彼らの全商業史が示してゐる。

(三一) タマス・テローク「價格の歴史」。ジェームス・ウキルソン「資本、通貨および銀行」。(後の書は、一八四四年、一八四五年、一八四七年「ロンドン・エコノミスト」に現はれた論文の集録)

同じやうにリカアドーは、ナポレオンの大陸^{コンチネンタル・システム}制および英國封鎖令の時分にも、かう主張した。

いはく、英國が商品の代りに金を大陸に輸出したのは、英國の貨幣が大陸諸國の貨幣に比して減價してをり、従つて英國商品の價格が比較的の高いからである。そして商品の代りに金を輸出する方が、一、そう有利な商業投機であつたからである、と。彼によると、英國は商品が高く貨幣の安い市場であつた。しかるに、大陸では商品が安く貨幣が高かつた。ところで英國の一著者はいふ。「實は、過去六年に亘つた戰爭の間、わが製造品および植民地生産物は、大陸制の影響の下に破産的な安さであつた。たとへば、大陸の金で評價された砂糖およびコーヒーの價格は、英國で銀行紙幣で評價されたそれらの價格の四倍ないし五倍の高さであつた。この時代は、フランスの化學者が甜菜糖を發見し、コーヒーをキコリウム(菊高苳)で代用することを工夫し、他方では、イギリスの百姓が糖水や糖汁で牝牛の肉づきをよくする實驗をした時であり、英國は、ヨーロッパ北部への密輸入を促進する商品保管倉庫をつく

るために、ヘリゴランド島を占領し、また自國の輕量製品を、トルコを廻つてドイツに送らうとしてゐた時代であつた。……世界のほとんとすべての商品がイギリスの倉庫に積まれ、フランスが出す免狀によつて讓渡される少量の商品の外は、みなそこに据ゑあかれた。この少量の商品のために、ハンブルグおよびアムステルダムの商人は、四萬ポンドないし五萬ポンドをナポレオンに拂つてゐた。一荷の商品を高價の市場から廉價の市場へもちきたす自由を得るために、かかる巨額を支拂ふとは、彼らもまた變な商人であつたといはねばなるまい。が、彼らに對していかなる選擇が許されてゐたか？ 一封度のコーヒーを銀行紙幣で六ペンスで買ひ、その一封度を金の三シリングないし四シリングですぐ賣ることの出来る場所へ送るか、それとも、金一オンスを銀行紙幣で五ポンドで買ひ、その一オンスが三ポンド十七シリング十ペンス二分の一で評價されてゐた場所へ送るかである。好ましい商法として、商品の代りに金が送り出されたのだなどといふのは、もちろん馬鹿げすぎてゐる。……その當時、英國ほど、一オンスの金に對して、望ましい商品の多量を手に入れることの出来た國は、世界中に一つもなかつた。ポナバルトは絶えず、イギリスの價格表を精細に調査してゐた。英國で金が高くコーヒーが安いことを見出すかぎり、彼の大陸制が奏效してゐるのだと満足してゐた。^(三三)リカードが始めて彼の貨幣理論を定式化し、地金委員會がそれを議會報告書の中に具體化したちやうどその一八一〇年には、すべての英國商品の價格が、その前年および前々年に比して破滅的な暴落を見せ、金の價値はそれに應

じて昂騰した。農産物だけは、その海外からの輸入が妨げられ、國內の供給は不作によつて減少してゐたので、例外であつた。^(三三)國際的支拂要具としての貴金屬の役割を、あまりに誤認してゐたリカードは、上院の委員會(一八一九年)の諮問に答へて、かういふことをさへいつた。「輸出による金の流出は、現金支拂が復活されて、そして通貨がその金屬水準を回復するとともに、直ちにやむであらう。」彼はちやうどよい時に彼の豫言を裏切つたところの、一八二五年の恐慌勃發の前夜に永眠した。

(三三) ジェームス・デアコン・ヒューム「穀物條例についての書翰」ロンドン、一八三四年、二九一—三二頁。

(三三) タマス・チーク「價格の歴史……」ロンドン、一八四八年、一一〇頁。

リカードが盛んに書いてゐた時代は一般に、世界貨幣としての貴金屬の機能を觀察するに適さなかつた。大陸制の施行以前は、貿易の決濟はほとんどいつも英國に有利であつた。大陸制施行中は、ヨーロッパ大陸との通商は實に微々たるもので、英國の爲替相場にはほとんど何の影響も與へなかつた。貨幣の移送は概して政治的性質のもので、リカードは、英國の金輸出において、補助金交附が演じてゐた役割を、全然理解してゐなかつたらし。

(三四) 前に引用した、ブレイクの「政府の支出によつて生ずる諸結果の考察」を参照。

リカードの同時代人にして、彼の經濟學の諸原理を支持する一學派をなした者の中で最も重要な人物は、ジ、エ、ム、ス、ミルである。彼は、リカードの貨幣理論を、その不充足をかくすに役立つて

むたところの筋違ひな國際的錯雜から切り離し、またイングランド銀行の運用に關する一切の政治的顧慮から離れて、單純な金屬流通の基礎にたつて證明しようと企てた。彼の主要論點はかうである。^(三五七)

「貨幣の價值は、貨幣が他物と交換する割合、ないしは他物の特定量との交換において與へる貨幣の量に等しい。この比例は、一國に存在する貨幣の總量によつて決定される。一國のすべての商品が一方にあり、一國のすべての貨幣が他方にあつて、直ちに兩者が交換されるとすれば、貨幣の價值すなはち貨幣と交換される商品の量は、全く貨幣自身の數量に依存することは明らかである。このことは、事物の現實の過程にあつても全く同様である。一國の商品の總量が、一度に貨幣の總量と交換されるといふことはなく、商品は一年中の異なる諸時に、一部分づつ、そしてしばしばごく少部分づつ、交換される。一つの交換に、今日役立つた貨幣と同じ貨幣片が、明日は他の交換に使はれる。貨幣のある部分は極めて多數の交換行爲に、他の部分は極めて少數の交換行爲に用ひられ、さらに他の部分は蓄積されて少しも交換に用立たない。かやうにさまざまであるその中にも、ある平均交換度數がある。それはもしすべての貨幣片が同一度數の交換を營むとすれば、そのおのおのによつて營まれるはずの度數に等しい。この平均度數はいくつと見てもよい。たとへば十回と見る。一國に存在する各貨幣片が十回の購買に用ひられるなら、それはあたかも貨幣片の總數が十倍されて、各片がただ一回の購買に用ひられると同一である。この場合には、總商品の價值は總貨幣の價值の十倍である。もし反對に、各

片が一年に十回づつ購買に用ひられる代りに、貨幣の總數が十倍されて、そして各片がただ一回づつ交換を行ふとすれば、この増加しただけのものは、一箇々々に見た貨幣片のおのおのの價值に、それに相應した減少をひき起すことは明らかである。すべての貨幣と交換されるところの商品の總量は、不變であると假定されてあるのだから、總貨幣の價值は、その量が増大した後も前同様である。で、もし十分の一だけ増大したと假定すれば、全量の各部分の方の價值たとへば一オンスの價值の方は、十分の一減つてをらねばならぬ。だから、貨幣總量の減少ないし増大がいかなる割合で起らうとも、他物の量に變化がないかぎり、この總量とその各部分の價值とは、交互に比例的減少または増大を來たす。この命題は明らかに、絶對的に真である。貨幣價值が騰貴もしくは低落することがあれば、貨幣と交換されえた商品の量と流通の速度とが同一であるかぎり、その變化はかならず、貨幣の比例的増加ないしは減少に起因するものであらねばならず、その他の原因に歸することは決して出來ない。貨幣の量が同一に止まるのに商品の量が減少すれば、それはあたかも貨幣の總量が増加したと同様であり、その逆も真である。同じやうな變化が、流通速度の變化によつても生ずる。流通度數の増加は、貨幣の數量の増加がもたらすものと同じ効果を生み、減少はちやうどその反對の作用をおこす。……もし年々の生産の一部分が全然交換されないなら——たとへば生産者自身が消費する物、ないしは貨幣に對して交換されない物のごとく——その部分は勘定にはいらぬ。貨幣と交換されないものは、

貨幣にとつては全然存在しないも同様であるから。……貨幣の増加と減少とが自由に起りうる場合には常に、一國に存在する貨幣總量は貴金屬の價值によつて規制される。……だが金銀は商品であり、その價值は他のすべての商品同様、その生産費すなはちそれに含まれる労働の量によつて決定される。^(三五)

(三五) ジェームス・ミル「經濟學原理」。引用文はパリのフランス譯(パリ、一八二三年)から譯す。
(三六) 同上、一二八一—一三六頁、散見。

ミルの智慧のすべては、勝手氣ままで馬鹿くさし一聯の假定につくされてゐる。彼は、商品の價格もしくは貨幣の價值が「一國に存在する貨幣の總量によつて」決定されることを證明しようとするのである。流通する商品の量と交換價值とが不變であり、流通速度も、生産費によつて決定される貴金屬の價值も、同様に不變であると假定し、しかも同時にまた流通する金屬貨幣の量が、一國內に存在する貨幣の量に比例して増減すると假定するのならば、これから證明すべきことをすでに假定してゐるといふことこそが、まことに「明らか」になる。さらに、ミルはまたヒュームと同様に、一定の交換價值の商品を流通させずに、使用價值を流通させる誤謬に落ちてをり、従つて、彼の假定のすべてを許すとしても、彼の命題は嘘になる。流通速度も、貴金屬の價值も、流通する商品の數量も不變であることは出来るが、しかし商品の交換價值の變化とともに、その流通のために或ひはより多量の貨幣を要し、或ひはより少量のそれを要するであらう。ミルは、一國に存在する貨幣の一部分は流通する

が、他の部分は寢てゐるといふ事實はこれを認めてゐる。しかるに彼は、馬鹿げきつた平均計算の助けをかりて、現實にはさう見えなくても、しかし本當は、一國にあるすべての貨幣は流通すると假定する。一千万銀ターレルが、一國において年二回流通したものと假定すると、もし各ターレルが一回だけしか流通しなくなれば、二千万ターレルが流通しうるであらう。そこでもし一國において、あらゆる形態で存在する銀の全量が一億ターレルだとしても、各個のターレルが五年に一回しか流通しなれば、その一億ターレル全部が流通しうると假定することが出来る。そこでまたかう假定することも出来るわけだ、いはく、世界のすべての貨幣がヘンブステッドで流通してをつて、その各片が年に三回流通する代りに、三百萬年に一回流通する、と。この一假定は、商品價格の總額と流通用具の量との關係の決定にとつては、他の假定と同じやうに重要である。ミルにとつては、商品を流通する貨幣の量と結びつけずに、その都度々々に、一國に存在する貨幣の全供給と結びつけることが、決定的に重要であると彼は感ずる。一國の商品の總量と「一度に」交換されるのではなく、商品の種々なる部分が、一年の種々なる時期に、貨幣の種々なる部分と交換されることは、彼もこれを認める。そこでこの不都合を除くために彼は、それは存在しないと假定するのである。その上にまた、商品と貨幣との直接對立、直接交換の全觀念は、單純な賣却と購買との運動、ないしは、購買用具としての貨幣の機能の運動から抽象されてゐる。支拂用具としての貨幣の運動においてすでに、この商品と貨幣との同時的

現象は消滅する。

十九世紀の商業恐慌、とくに一八二五年および一八三六年の大恐慌は、リカアドーの貨幣理論をすこしも發展させなかつたが、しかしその新しき適用を喚起した。この恐慌はもはや、ヒュームにあつての十六七世紀の貴金屬の下落、もしくは、リカアドーにあつての十八世紀および十九世紀初頭の紙幣の減價のやうな、孤立的な經濟現象ではなかつた。それは實に、ブルジョアの生産過程の一切の要素の矛盾が爆發するところの、その大世界市場暴風雨であり、しかもその根因と、その防禦とが、この過程の最も表層的で最も抽象的な部面、貨幣流通の部面のうちに求められてゐた。經濟學的天氣豫報家たちの一學派が出發した獨特の理論的前提は、事實において、リカアドーが純粹金屬流通の法則を發見してゐるといふ獨斷以外の何ものでもなかつた。そしてこの人たちのために残された仕事は、信用流通ないしは銀行紙幣流通を、この法則に適應させることであつた。

商業恐慌における最も一般的で最も分明な現象は、商品價格の長期の一般的騰貴について、その突然の一般的低落が起ることである。商品價格の一般的下落は、すべての商品に對する、貨幣の相對的騰貴として、また、商品價格の一般的騰貴は、貨幣の相對的騰貴の下落として、いひ表はすことが出来る。そのいづれにあつても、當の現象が述べられてはゐるが、説明されてはをらぬ。私が問題を出して、價格の一般的下落と交替にあつて一般的週期的騰貴を説明せよ、といつても、また商品

に對する貨幣の相對的騰貴の週期的騰落を説明せよ、といひなほしても、語法の相違は、ドイツ語から英語へのその翻譯も同様、すこしも問題を變化させない。だから、リカアドーの貨幣理論は、異語同義に因果關係の外觀を與へるので、非常に便利なものである。商品價格の週期的一般的低落はどこから生ずるか？ 貨幣の相對的騰貴の週期的騰貴から。では、商品價格の一般的週期的騰貴は？ 貨幣の相對的騰貴の週期的低落からくる。さういふ位なら、價格の週期的騰貴と下落とは、その週期的騰貴と下落とから生ずる、といつてもすこしも差支へないはずであつた。問題そのものからしてが、貨幣の内在價值すなはち貴金屬の生産費によつて決定した價值が、不變であるといふ假定の下に出されてをる。それがもし單なる異語同義ではないといふなら、それならば最も初等的な概念の誤解に基づくものである。Bで量られたAの交換價值が下落すれば、この下落は、Aの價值の下落から起りうると同じやうに、またBの價值の騰貴からも起りうることを吾々は知る。Bで量られたAの交換價值が騰貴する場合は、ちやうどその反對である。異語同義を因果關係に轉化することをさへ許してしまへば、その他のすべてはわけもなくものになる。商品價格の騰貴は貨幣價值の下落から生ずるが、しかし、貨幣價值の下落は、リカアドーの教へるところによれば、過多の通貨から、従つてすなはち、流通する貨幣の量が、彼自身の内在的價值と商品の内在的價值とによつて決定された水準以上に上ることから生ずる。反對に、商品價格の一般的下落は、通貨過少のために貨幣價值がその内在的價值以上に騰

貴することから生ずる。価格は、貨幣が週期的に、或ひは過多に或ひは過少に流通するが故に、週期的に騰貴し低落する。かりに諸價格の騰貴が減少した貨幣流通と同時に起り、價格の低下が増加した流通と同時に起ることが證明されたとしても、それにもかかはらず、流通する商品量の減少もしくは増加——それは統計的には立證しえないとはいへ——の結果として、流通する貨幣の量が、絶對的でないまでも、相對的に増加もしくは減少したのだと主張することも出来る。吾々が見たやうに、リカードによれば價格のこの一般的變動は、純粹の金屬流通にあつても起らねばならないが、しかしその代替作用によつて平衡化される。たとへば過少の通貨が商品價格の低下を、その低下が商品の對外輸出を、この輸出が今度は金の輸入を、この輸入がふたたび商品價格の騰貴を、ひき起す。反對に、通貨過多の場合には、商品が輸入され貨幣が輸出される。それにしても、このリカード式の金屬流通そのものの性質から發生する一般的價格變動にもかかはらず、その激烈な強力的な形態、恐慌形態は、發展した信用制度の時代に屬するのであるから、銀行紙幣の發行が、嚴密に金屬流通の法則によつて規制されはしないことは、明々白々であらう。金屬流通は、直ちに鑄貨として流通に入つて、そして流出入によつて商品價格を騰落させるところの、貴金屬の輸出入において、自身の救濟手段を有する。商品價格に對する同じ作用は、いまや、金屬流通の法則の模倣を通じて、銀行によつて人為的にひき起されなくてはならぬ。金が外國から流入すれば、それは、通貨が不足して貨幣價值が高すぎるとともに、商品價格は低すぎ、従つて新たに輸入された金に比例して、紙幣が流通に投げ込まなければならぬといふことを證示する。反對に、金が國外に流出するのに比例して、紙幣は流通から引き去られねばならない。いひ換へれば、銀行紙幣の發行は、貴金屬の輸出入によつて、ないしは爲替相場によつて、規制されなくてはならぬ。リカードの謬まつた前提——金は鑄貨に外ならず、従つて輸入される金はすべて流通する貨幣を増加させ、それ故に價格を騰貴させ、また輸出される金はすべて鑄貨を減少させ、それ故に價格を下落させるといふ、この理論的前提は、ここにおいて、いかなる場合でも、金の存在量と同量の鑄貨を流通させるといふ、實際的實驗となる。英國で「通貨主義」の學派として知られてゐるオヴァストン卿（銀行家ジョーンズ・ロイド）、トレンス大佐、ノーマン、クレイ、アーバースノット、その他多數の論者は、この教義を説いたばかりでなく、一八四四年—一八四五年のサー・ロバート・ピールの銀行條令を介して、それをイギリスおよびスコットランドの銀行の、銀行立法の基礎たらしめた。最大な國家的規模において行はれた實驗を経た上での、この教義の理論上および實際上の恥づべき失敗は、信用理論において始めて述べることが出来る。が、すくなくとも貨幣をば、流通的要素としてのその流動形態において孤立させるリカードの學說が、貨幣主義の迷信家らの夢想だもしなかつたほどの絶對的な、ブルジョア經濟への影響を、貴金屬の干満に歸することに終つてゐることだけは明らかであらう。紙幣を最完全な形態として説くリカードは、かくして地金主義者

らの豫言者となつたのである。

(三七) 一八五七年の一般的商業恐慌の勃發の數箇月前、一八四四年—一八四五年の銀行條令の効果を調査するために、下院の一委員會が設けられた。この法律の理論上の父であるオヴァーストーン卿は、委員會の陳述において次のやうな自慢をした。「一八四四年の條令の原則を嚴密かつ敏速に遵守することによつて、萬事が雖然かつ圓滑に進んで來た。金融制度は安泰で發動もしない。國家の繁榮は疑ひを容れず、一八四四年の條令の實明さに對する公衆の信任は日に日に勢ひを加へつつある。もし本委員會が、この條令の基礎たる原則の健全とその獲得した有利な結果について、これ以上の實證を求めらば、本委員會に對する眞實にして充分な答は、乞ふ諸君の周圍を見よ。國家の貿易の現狀を、國民の満足を、社會の全階級に行き渡れる富と繁榮とを見よ。そしてしかる上にはじめて委員會は、これらの結果をもたらせるこの條令の繼續に干渉すべきかいなかを決してしかるべきであらう。」かういつてオヴァーストーンは一八五七年七月十四日に、自分の喇叭を吹いてゐた。同じ年の十一月十二日には、内閣はその責任をもつて、このすばらしい一八四四年の法律を停止しなければならなかつた。

ヒュームの學說、すなはち貨幣主義に對する抽象的對立が、かやうに、その最後の歸結にまで發展されてしまつた後に、ステュアートの貨幣の具體的把握は、遂にタマズ・テュークによつてもう一度その正しき形にとりかへされた。^(三八)テュークは、彼の原理をいかなる學說からも導き出さず、却つて一七九三年から一八五六年にいたる商品價格の歴史の、嚴密なる分析から導き出すものである。一八二三年に現はれた彼の價格史の第一版においては、テュークはまだ全くリカアドーの學說に囚はれてをり、徒らに、實際の諸事實をこの學說と妥協させようとしてもがいてゐる。一八二五年の恐慌の後に現はれた彼のパンフレット「通貨について」ですが、後にオヴァーストーンによつて法律的效力を與へら

れた諸見解の最初の纏まつた表述とも見れば見られる。だが、商品價格の歴史の繼續的研究は、彼を下のごとき洞察に到達させずにはおかなかつた。いはく、理論において假定されてゐるやうな諸價格と、流通要具數量との直接關係は單なる幻想である。貴金屬の價值が不變なる場合の、流通要具の膨脹および收縮は、常に價格の變動の結果でこそあれ、決してその原因ではない。貨幣流通は一般に、第二次的な運動にすぎない。また貨幣は、現實の生産過程において、流通要具としてのそれとは全く違つたいくつかの形態確定を享得する、と。彼の研究の細目は、單純金屬流通以外の領域に屬する車輛であり、従つて、それと同じ方向にあるウキルスンおよびフライトンの諸研究と同様、ここではまだ明らかにすることが出来ない。^(三九)すべてこれらの著者は、貨幣を一面的には把握せず、その種々なる要因において把握してはをるが、しかしただ物理的のみ把握し、それらの要因相互なり、それらと經濟的範疇の全體系となりの、生きた聯關においてではない。従つて彼らは、流通要具と區別しての貨幣を誤まつて資本と混同し、時には商品とさへも混同する。とはいへ彼らは、他方ではまたをりをり兩者と貨幣との區別を現實にすべく餘儀なくされてゐる。^(四〇)たとへば金が外國に送られる時には、事實においては資本が外國に送られるのだが、しかし同じことは、鐵や棉花や穀物、一口にはどの商品でもが輸出される時に起る。そのいづれもが資本であり、であるから資本としては區別されず、貨幣と商品としてこそ區別される。すなはち、國際的交換要具としての金の役割は、その資本としての形態確

定から生ずるのでなく、貨幣としてのその特殊の機能から生ずるのである。同様に金が、ないしはそれに代つて銀行紙幣が、支拂要具として内國商業において機能する時、彼らは同時に資本である。がしかし、商品形態をとる資本は、たとへば恐慌の場合がはつきりと示すやうに、彼らの代理をするとは出来ない。すなはち、金が流通要具となるのは、貨幣としての金の、商品と異なるところによつてであつて、金の資本としての存在によつてではない。たとへば一定の價值量を利用できで外國に貸すために、直接に資本が資本として輸出される場合でさへ、それが商品の形態で輸出されるか、金の形態で輸出されるかは、時の事情によつて異なるのであるし、そしてもし後者の形態で輸出されるとすれば、それは商品と對立しての、貨幣としての貴金屬の特殊の形態確定のために起るのである。總じて前記の著者たちは、貨幣をばまづ、單純商品流通内で展開されて、そして過程しつつある諸商品の關係そのものから生長し出づるがごとき、その抽象的姿態において觀察するといふことをしない。従つて彼らはつねに、貨幣が商品との對立において受ける抽象的形態確定と、資本、收入、等、等のより具體的な諸關係が包藏されてゐるところの、貨幣の諸規定とのあひだを彷徨する。

(三八) テークは、ステュアートの著書を全然知らなかつた。それは、彼の著「一八三九年—一八四七年の價格の歴史」(ロンドン、一八四八年)を見れば明らかである。この書物において彼は、貨幣理論の歴史を概説してゐる。

(三九) テークの最も重要な著書は、彼の協力者ニウマークが六巻にして發行した「價格の歴史」のほかに、「通貨の原理を論ず、通貨と價格との關係……」(第二版、ロンドン、一八四四年)がある。ウキルソンの著書は、前に引用しておいた。

は最後に、ジョン・フライトンの「通貨の調節について」(第二版、ロンドン、一八四五年)を挙げておかねばならぬ。

(四〇) 「商品としての金、すなはち資本」と流通要具としての貨幣とは區別されねばならぬ。テーク「通貨の原理を論ず」一〇頁。「金銀は、それが届く時、供給するべき正確な額に近いものを實現すると期待して差支へない。……金銀は、それが貨幣として普遍的に使用されてゐるといふ事情のために、他のあらゆる名稱の商品に比して限りなく大なる長所を有する。對外にせよ、國內にせよ、負債の支拂に用ふるものとして契約されるのは、茶でもコーヒーでも砂糖でも藍でもなく、銅貨である。だから、指定通りの銅貨ないしは地金——後者ならば送附さきの國の造幣局なり市場なりを通じて、遲滞なくその銅貨に轉化されるところの——をもつてする送金は、送金者をして、需要の缺如や價格の變動が與へる失望を経験することなしに、この目的を達せしめるところの最も確實な、迅速な、また正確な手段を供するものでなければならぬ。」(フライトン、第一章、一三二—一三三頁)。「(金銀以外の)いかなる商品でもは、數量の點なり種類の點なりで、送附さきの國の平常の需要を超えないとは限らなす。」(テーク「通貨の原理……」)

(四一) 吾々は、資本の貨幣への轉化を、第三章で觀察するであらう。第三章は資本をとりあつかひ、この第一篇の終りをなす。

〔附〕經濟學批判の序論

(一) 生産一般

ここでの論題は、まづ、物質的生産である。

出發點は當然に、社會において生産する諸個人、——従つて社會的に規定されたる、諸個人の生産である。スミスおよびリカードが出發するところの、個々の孤立の獵師や漁夫は、十八世紀の殺風景な想像に屬する。それはロビンソン物語であり、それも決して文化史家らが想像するやうに、單に過度の文雅の反動や誤解の自然生活への復歸をあらはすのではない。またかの、生まれながらに獨立の各主體をば、契約によつて關係させ結合させるところの、ルッソーの「社會契約」と同様、さうした自然主義に基づくでもない。この方は、大小のロビンソン物語のつやであり、美的なつやにすぎない。で、それ(孤立獵人——譯者)はむしろ、あの十六世紀以來準備され、十八世紀に至つて成熟への巨歩を進めたところの「市民社會」の豫想である。この自由競争の社會では、個人は、以前の歴史的諸期において、彼をば、一定の限られた人間集團の所屬物たらしめてゐた自然的束縛や、その他のものから解放されて現はれる。スミスもリカードも、まだ全くその肩におぶさつてゐたところの、十八世紀の豫言者たちの頭には、この十八世紀の個人——一面では封建的社會形態の崩壞の產物、他面では

十六世紀以來新しく發展した諸生産力の産物——が、理想として浮かんでをり、その存在は過去の存在とされてゐる。歴史の成果としてでなく、歴史の出発點として。

この個人は合自然に見え、かつ彼らの人間性の觀念と一致してゐたために、歴史的に生成したものと見え、自然によつて定められたものに見えた。この錯覺は、これまでのどの新時代にも特有なものであつた。貴族としてある點では十八世紀に逆らつて、むしろ歴史的脚地に立てるステューアートは、かうした素朴に陥らなかつた。奥深く歴史を廻れば廻るほど、個人は、従つてまた生産する個人も、ますます非自立的なものとして、より大なる全體に所屬するものとして現はれる。すなはち、初めはなほ全く自然的に家族において、および部族に擴大された家族においてさうであり、後には諸部族の對立および融合から生まれた、種々なる形態の共同團體においてさうである。で、やうやく十八世紀において、「市民社會」^{ブルジョア}においてはじめて、社會的結合の種々なる形態が、個々人の私的の諸目的にとつての單なる手段として、外部的必然として、個々人の前に現はれて来る。がこの立場、孤立的個々人の立場をつくり出すところの時代こそは、まさに、これまでのところ最も發達した社會的（該立場よりすれば一般的）諸關係の時代なのである。人間は、最も文字通りの意味で政治的動物（*Zoon politikon*）であり、單に社會的動物たるのみならず、また社會内でのみ自己を孤立化しうる動物である。社會外での、孤立の個人の生産なるもの——諸々の社會力をすでに動的に内具した文明人が、間違つて無人島

へ吹き流されでもしたら起るかも知れぬ稀有のこと——は、共に生きて共に話す諸個人がなくて生ずる言語の發達といふにも等しい空想である。ここでこのことを、これ以上論ずるには及ばない。十八世紀の人々にこそ意味も意義もあつたあの馬鹿げたことが、もし、またもバスター、ケリー、ブルードンらによつてしごく眞面目に經濟學の中へもちこまれてゐなかつたら、この點には全く觸れずに済んだことであらう。ブルードンやその他にとつては、自分ではその歴史的成立について知るところなき經濟關係の起原をば、アダムやプロメシウスや、かちやんと出來上つたその經濟關係の觀念を考へ當てたのだとか、そこでそれが實行されるのだとか、いろいろと神話化することによつて歴史哲學式に展開することが、無理もなく快適なのである。空想的な常套語くらの退屈に無味乾燥なものはない。で、生産といふからには、つねに、特定の社會的發展段階における生産——社會的諸個人の生産のことである。だから、一般的に生産を論ずるのには、さまざまに變相しゆく歴史的發展過程を跡づけねばならぬか、もしくはは一定の歴史的時代、たとへば現に本論本來の主題たる近代の、ブルジョア的生産を扱ふのだといふことを、前もつて表明せねばならぬかのやうにも思へよう。だが、どの生産の時代にもある特質が共通であり、共通の規定がある。生産、一般は一つの抽象ではあるが、しかしそれが實際に共通なものを浮き上らせ定着させて、反覆の勞を省いてくれるかぎり、聰明なる抽象である。それにしてもこの一般的なもの、比較によつて拾ひ出された共通なものは、それ自身一つの、多様に

組成されたもの、種々なる規定へと分岐するものである。これらの規定の二三のものは、すべての生産の時代に屬し、他は二三の時代に共通する。いくつかの規定は、最も新しい時代にも、また最も古い時代にも共通にあるであらう。その種のもののない生産は考へることが出来ない。だが最も發達した言語が、最も發達しない言語と法則や規定を共通にするといふなら、あたかもその發達を形づくるところのものを、この一般的なものと共通なものからの差異であるのだ。一般に、どの生産にも通ずる規定なるものが抜き出されねばならないのは、主體たる人類も客體たる自然も同じ人類であり自然であることから、すでに生ずるところの一樣性に氣をとられて、本質的差異を忘れないがため、まさにそのためである。これを忘れるところに、たとへば近世經濟學者らの智慧のすべてがある。彼らは、既成の社會的諸關係の恒久性と調和性とを證明し、たとへば、いかなる生産も生産要具なしにはありえない、たとへそれが手であらうと、といつたり、またいかなる生産も累積された過去の労働なしにはありえない、たとへその労働が野蠻人の反覆實行によつて、その手に集積集中された過去の労働にすぎなからうと、と論じたりする。資本はなにしろ生産要具でもあり、對象化された過去の労働でもある。かくて資本は、一般的、永久的な自然關係である——すなはちもし私が、「生産要具」や「累積された労働」を始めて資本たらしめるところの、あたかもその特殊のものを看過するならば。で、かくして生産關係の全歴史は、たとへばゲーリーにとつては、政府によつて惡意に劣悪化されたものとして映ずる。

生産一般なるものがないとすれば、一般的生産もない。生産はつねに、一つの特種の生産部門であるか、もしくは一つの總體である——たとへば農業、牧畜、製造業、等。だが經濟學は工藝學ではない。與へられた社會的段階における生産の一般的諸規定が、特種の生産諸形態に對してもつ關係に對しては、別に述べねばならぬ(後に)。

最後に、生産はまた特種の生産であるばかりではない。諸生産部門の、大なり小なりの一總體において活動してゐるのは、つねに一定の社會體、一つの社會的主體に限られる。科學的敘述が現實的運動に對してもつ關係は、同様に、まだここで論ずべき範圍に屬さない。「で、吾々は」生産一般と、特種生産部門と、生産の總體と「を區分しなければならぬ」。

一般的な部分に筆を起すのが經濟學の慣行であり、そしてそれこそはまさに、「生産」なる題下に現はれる部分であつて、(たとへばジョン・ステュアート・ミルを見よ)、すべての生産のすべての一般條件が、そこでとりあつかはれてゐる。

この一般的な部分は、

一、生産が可能なるために缺くべからざる諸條件からなり、もしくはおもて向き、なるものとされる。すなはち事實上、すべての生産の最も本質的な諸要因を示すにほかならぬものとされる。が、そ

れはしかしまもなく見るであらうやうに、事實上、平板な異語同義に打ち伸ばされるしごく單純な二の規定に歸着してしまふ。

二、多かれ少かれ生産を促すところの諸條件、たとへば、アダム・スミスの進歩的および停滯的社會狀態「についての説明」のごとき。

この、彼にあつては皮相的なスケッチとして價值をもつところのものを、科學的意義にまで引き上げるのには、個々の國民の發展における、生産性の程度(Grade der Produktivität)を異にする諸時期に關する攻究が必要であらう、——この攻究は、本論の主題の本來の範圍外にあるのだが、主題に入り來るかぎりでは、競争、蓄積、等を論述する際になさるべきものである。一般的把握に於いての解答なるものは、一産業國民は、彼らが全般的にその歴史的頂上にたつ瞬間に、彼らの生産の頂上にあるのだ、といふがごとき一般的なものに歸着する。ないしはまた、たとへばある種の人種的素質や氣候や自然的事情——海的位置や地味、等——は、他種のものよりも一そう生産にとつて有利だ、といふがごとき一般的なもの。これもやはり、富の諸要素が主觀的および客觀的に一そう高度に存在すれば、それだけ富は容易につくり出される、といふ異語同義に外ならない。事實としては、一國民は、その主要關心がいまだ利得物にはなくて利得することに存するあひだは、彼らの産業的頂上に「あるのを吾吾は見る」。そのかぎりでは、アメリカ人はイギリス人の上にある。

だが、これだけがこの一般的部分において、經濟學者らのかかはるところのすべてではない。それよりはむしろ、生産が——たとへばミルを見よ——分配とは違つて、歴史に依存することなき恒久の自然法則に依つたものとして表述せられねばならず、それに際してさらに、ブルジョア的諸關係が、抽象の社會の犯すべからざる自然法則であるとして、そつと袖の下ですり換へられるのだ。これが、彼らの手続き全體の、多かれ少かれ意識的な目的なのである。反對に分配の場合には、人々はありとあらゆる得手勝手をあへてして來たのだといふ。實際的關係にたつ生産と分配とを、かくも亂暴に引き離してゐる點は全然不問に附すとしても、これだけのことは初めから明らかでなければならぬ。すなはち、異なる社會段階における分配がどれほど多種多様であらうと、ここでもまた生産の場合同様に、共通の規定を抽出することも出來れば、またあらゆる歴史的差異を混同して、一般的人間的諸法則の中へ消え込ますことも出來ねばならぬこと、これである。たとへば奴隸、農奴、賃労働者は、いづれも奴隸、農奴、賃労働者として生存しうるだけの一定量の食物を得る。貢物で生活する征服者、租税で生活する役人、地代で生活する地主、喜捨で生活する出家、ないしは十分一税で生活する僧侶は、いづれも奴隸、等、等のそれとは違つた法則で定めるところの、社會的生産の一定量を得る。すべての經濟學者が、この項下にうちたてる二つの主要な點は、(一)所有權と、(二)司法、警察、等によるその確保とである。これらに對してはしごく簡單に答へうる。

一、あらゆる生産とは、一定の社會形態内で該社會形態を方便として、個人が自然を我物と化すことである。この意味においてなら、所^{アイゲンツウム}有^{アンシャイン}(我物と化す)が生産の一條件であるといふのは異語同義である。が、いきなりそれから、所有の特定形態たとへば個人所有權(私有財産)へと一足とびに飛ぶのでは、ちと滑稽である。(それはおまけに、反對形態たる非所有をさへ條件として假定するものだ)。歴史はむしろ、所有の原始形態としては共同所有を見せ(たとへばインド人、スラヴ人、古代ケルト人等における)、これは市町村所有の形においてずつと後代まで重要な役目を演じてゐる。富がいづれの所有形態の下においてよりよく發展するかの問題には、ここではまだ少しも觸れてはゐない。が、何らの所有形態も存在しないところに生産はありえない、従つてまた社會も、といふがごときは一つの異語同義である。なにものをも我物となさない我物化とは、一つの主語矛盾である。

二、財産の保護、その他。かかるたわいもない事柄も、その眞實の姿に詮じつめると、當の説法者たちが識るより以上のことを物語る。すなはち、生産の各形態は、それ自體の法律關係、政府形態、等をつくり出す、といふそれである。「彼らの」粗笨と沒概念とは、有機的に結びついたものを偶然的に關聯させ、單なる反射關係たらしめようとするところにある。ブルジョア經濟學者の頭には、近代の警察制度の下では、たとへば腕力權の時代よりもよく生産が行はるべきだ、といふぐらゐることしか浮かんでをらぬ。彼らはただ腕力權もまた一つの權利であり、強者の權利は彼らの「法治國」においても

別な形態で存續することを忘れてゐるだけである。

生産の一定段階に相應する社會狀態が始めて成立する時、もしくはすでにそれがすぎ去る時、當然に生産の故障が生ずる——時によつてその程度と作用とに相違はあつても。

これを要するに、すべての生産段階に共通なる諸規定があり、思考によつてそれらは一般的規定として定着される。が、いはゆるすべての生産の一般的諸條件なるものは、現實的歴史的生産段階のひとつにも觸れないところの、さうした抽象的諸要素にすぎないものである。

(二) 分配、交換、消費に對する生産の一般的關係

これ以上生産の分析に進みいる前に、經濟學者が生産と並立させてゐる種々なる項目に、注意を拂ふ必要がある。ごくわかりきつた表述は、次のごとくである。すなはち、生産において、社會の成員は自然の生産物を人的欲望に適合させる(産出する、形狀づける)。分配は、個々人がこの生産にあづかる割合を定める。交換は、分配によつて自己に歸したる數量を、特殊の生産物に換へんと欲する個人に、その生産物を供給する。最後に、消費において、生産物は享樂の對象となり、個人的充用の對象となる。生産は、欲望に適合した事物を生みだし、分配はそれを社會的法則に従つて頒ち、交換はこの一度わかたれたものを再び個々の欲望に従つて頒ち、最後に、消費において生産物は社會的運動から離脱し、直接に個々の欲望の對象、奉仕者となつて、それをば享樂において充足する。だから、生産は起點として、消費は終點として、分配と交換とはその中間として現はれ、中間はさらに、分配は社會から、交換は諸個人から出發する要因たるをもつて、二重の相をもつことになる。生産においては人が客觀化され、「消費」においては物が主觀化される。分配にあつては社會が、一般に行はれる定則の形において、生産と消費間の媒介をなし、交換にあつては生産と消費とは、個人の偶然的な決定

を通過して媒介される。

* 草稿には「人」とある。

分配は、生産物が個人の手にわたる割合(數量)を決定し、交換は、分配によつて個人に許された分け前に應じて、彼が要求するところの生産物を決定する。

生産と、分配と、交換と、消費とは、かくして、正則の論理公式を形づくり——生産は一般を、分配および交換は殊別を、消費は個別を表はしつ——全體がそれに連繫される。これはいかにも連關ではあるが、しかも皮相的なそれである。生産は、「經濟學者らによれば」一般的な自然法則によつて決定され、分配は、社會的偶然によつて決定され、従つて生産に對して多かれ少かれ助成的な作用を及ぼしうる。交換は、形式的(?)な社會的運動として兩者の中間にあり、そして終局點たるのみならず、また究竟目的たりとされるところの、消費の結行爲は、それが再び出發點へ反作用して、もつて新たに全過程を導きいれるかぎりのほかは、本來、經濟學の範圍外にある。

相關的なものを無殘に引き裂くといつて經濟學者らを難する反對論者——彼らの仲間外の者にせよ仲間の者にせよ——は、みな、彼らと同じ脚地に立たなければ彼ら以下に立つものである。經濟學者らはあまりに、生産のみを自己目的として見つめすぎる、といふ非難ほどありふれた非難はない。これは、分配についても同じやうにいへよう。この種の非難はまさに、分配をもつて生産とならびたつ

自立的、非依存的な分野なりとなす經濟學の見解に基づくものである。或ひはまた、これらの要因が統一において把握されなかつたと「經濟學者らを難する者がある」。あたかもその引き裂きが、現實から教科書へ闖入したのではなくて、逆に教科書から現實へ闖入したかのやうに、またあたかもここでの問題が、諸概念の辯證的均衡にかかはることであつて、現實の諸關係の把握にかかはることではないかのやうに！

A 生産は直接に消費でもある。二様の消費、主觀的と客觀的と。生産することにおいて自己の諸能力を發展させる個人は、また、生産なる行爲においてそれらをば放出し、消耗する。それは、生産が一種の生活力の消費であるのと全く同様である。次に、生産することは生産手段の消費であつて、後者は使用され消耗され、一部分（たとへば燃料の場合のごとき）は再び一般諸元素に分解される。同じやうに原料の消費にしても、それは自然の形態および状態を保持することなく、却つてそのあとかたもないものにされる。だから、生産の行爲自體はそのあらゆる瞬間において、また消費の行爲でもある。が、このことは經濟學者も認めてゐる。直接に消費と同一なものとしての生産、直接に生産と同時に起るものとしての消費——それを彼らは、生産的消費と名づける。この生産と消費との同一は、スピノザの命題「決定は否定なり」に當る。だが、この生産的消費の定義は、まさにこの生産と同一なる消費をば、本來の消費から分離せんがためにうち立てられ、本來の消費に至つてはむしろ、

破壊的な對當物と解されてゐる。では、本來の消費を見よう。

消費が直接にまた生産でもあることは、自然界においては、諸元素や諸化合物の消費が植物の生産であるのと變らない。消費の一形態、たとへば榮養において、人間が自己の肉體を生産することは明らかである。が、これは、他種のあらゆる消費に當て嵌まることで、消費は一面ならかの仕方において人間を生産する。「それは」消費的生産である。しかるに經濟學者らはいふ。この消費と同一なる生産は第二の生産であり、第一の生産の生産物の破壊から生ずるそれである。第一のにおいては生産者が物件化され、第二のにおいては物件が人間化される。だから、この消費的生産は——それが、生産と消費との直接の合一なるにもかかはらず——本來の生産とは本質的に異なるものである。生産が消費と、消費が生産と同時に起るところの直接一元が、それ自體の直接二元をなりたせる、と。

で、生産は直接に消費であり、消費は直接に生産である。おのものは直接に他方の反對ではある、が、同時に双方のあひだには媒介運動がある。生産は消費に媒介してその材料をつくり出す——生産がなければ、消費は自己の對象を缺いたのだ。が、消費もまた、生産物にとつての主體をつくり出してもつて生産に媒介する——その主體のためにこそ、生産物は生産物なのだ。生産物は、消費において始めて最後の完成を得る。列車の運轉されてゐない鐵道、すなはち利用されず消費されざる鐵道は、ただ可能性としての鐵道であつて、現實のそれではない。生産なくして消費はないが、また消費がなけ

れば生産もない。あつたらそれは、何の目的もない生産であらう。消費は實に二重に生産を生産する。

* 草稿には "finch" とあり、以下しばしばさうであるが、いちいち "Vollendung" に改めておいた。

第一には、消費において生産物は始めて、現實の生産物となるからである。たとへば着物は、それを着る行為によつて始めて現實に着物となるし、住まれてをらぬ家は事實上なら現實の家ではない。すなはち消費において始めて生産物は、單なる自然物と異なる生産物としての自己を立證し、生産物となるのである。消費は、生産物を破壊してもつて始めてそれに完成を與へる。けだし、生産物は、ただに物件化された行動としてのみならず、また行動する主體の對象としてのみ生産の「成果」なのだから。

第二に消費は、新たな生産への欲望を、すなはち生産の前提であるところの、生産の概念的、内面促進的な理由をつくり出すことによつて、生産を生産する。消費は、生産の衝動をつくり出し、かつはまた、生産において目的決定的に働くところの對象をもつくり出す。生産が消費の對象を外部的に供することが明らかなら、消費が、生産の對象を内的肖像として、欲望として、起動力としてまた目的として観念的に定めることも、従つてまた劣らず明らかである。すなはち消費は、生産の對象をさらに主觀的な形態においてつくり出す。欲望なくして生産はない。しかるに消費は、欲望を再生産する。

これに對應して生産の側では、

一、生産は消費にその材料を、對象を供給する。對象のない消費は消費でもなんでもない。すなはちこの方面では、生産は消費をつくり、消費を生産する。

* 草稿には「生産」とある。

二、が、生産が消費のためにつくり出すのは、その對象ばかりではない。生産は消費に確定を與へ、性質を與へ、完成を與へる。ちやうど消費が、生産物としての完成を生産物に與へるやうに、生産は消費に完成を與へる。第一に、消費の對象は決して對象一般ではなく、特定の對象であつて、それがある特定の仕方で消費されてをり、その仕方がさらに生産そのものによつて媒介されてゐる。飢ゑは飢ゑでも、フォークとナイフで喰べる料理した肉をもつて充たされる飢ゑは、手と爪と牙の助けで生肉を喰らひつくすそれとは違つた飢ゑである。で、ひとり消費の對象のみならず、また消費の方法までが生産によつて生産される——従つて客觀的にのみならず、また主觀的にも。すなはち生産は消費をつくり出す。

三、生産は、欲望に材料を供するだけでなく、また材料に向つて欲望をも供する。消費が、その原始の自然的粗野と直截とから脱出する——まだそこに止まつてゐるのならそのこと自體が、なほ自然的粗野のうちにある生産の結果だといへようが——、そこから脱出するとすれば、消費はそれ自身、

起動力として消費對象の力をかりてするのである。消費が、對象に對して感ずる欲望は、對象の知覺を通してつくり出されてゐる。藝術品——他のいかなる生産物でも同じことだが——は、藝術意識あり鑑賞能力ある公衆をつくり出す。生産はだから、ただ主體のために對象を生産するだけでなく、また對象のために主體を生産するものである。

すると生産は、(一)消費に材料を供することにより、(二)消費の方法を決定することにより、(三)生産によつて始めて消費對象と定められたる生産物をば、欲望として消費者のうちによび起すことによつて、消費を生産する。生産はそれだから、消費の對象と、消費の方法と、消費の起動力とを生産する。同様に消費は、生産者をば目的たらしめる(?)ことにより、また欲望を鼓舞することによつて、生産者の素質を「生産する」。消費と生産との同一は、かくして三重に現はれる。

一、直接的同一——生産は消費であり、消費は生産である。消費的生産。生産的消費。國民經濟學者らは、双方ともこれを生産的消費と呼ぶが、なほ一つの區別をする。すなはち、前者は再生産として、後者は生産的消費として表はされてゐる。前者に關する研究のすべては、生産的あるひは不生産的勞働にかかはり、後者のそれは生産的あるひは不生産的消費にかかはる。

二、生産と消費とは、おのおの一方が他方の手段として現はれ、他方によつて仲介されること、これは兩者の交互的依存として表はされる——一つの運動、それによつて兩者は互ひに結びつけられ、

各自は交互に缺くべからざる物として現はれるのだが、しかもそれがなほ外部的に止まつてゐる。

生産は、消費にとつての外的對象としてその材料をつくり、消費は、生産にとつての内的對象として、目的として、欲望をつくる。生産なくして消費なく、消費なくして生産なし。これは經濟學において多くの形で表はされて(?)ゐる。

三、生産が直接に消費であり、消費が直接に生産であるばかりでない。また單に、生産が消費の手段で、消費が生産の目的——すなはちおのおのが他に對象を供し、生産は消費の外的對象を、消費は生産の觀念的對象を供するといふだけでもない。それだけではない、兩者のおのおのが、直接に他方であり他方を媒介するだけではなくて(?)、その上になほ兩者のおのおのは、自身を完結することによつて他方をつくり、他方とともに自身をつくる(?)。消費は、始めて生産の行爲を完結する——生産物を生産物として完成することによつて、それを破壊することによつて、それにおける獨立の物的形態を消耗しつくすことによつて、さらにまた、生産の第一行爲において發展された生産への志向をば、くりかへしての欲求によつて完成にまで高めることによつて。すなはち消費は、よつてもつて生産物が生産物となるところの結終行爲であるだけでなく、またそれによつて生産者が生産者となるところの「それ」でもある。他方、生産は消費を生産する——特定の消費方法をつくり出すことにより、次には消費への刺戟を、消費能力そのものを、欲望としてつくり出すことによつて。この第三に規定

された同一は、經濟學では、需要と供給と、欲望と對象と、社會によつてつくられる欲望と自然の欲望との關係において、さまざまに説明されてゐる。

かかる次第で、ヘーゲル學徒にとつては、生産と消費とを同一化するくらゐたやすいことはない。そしてそれは、社會主義的美文學者のみならず、また經濟學者そのものによつてもなされた。たとへばセイにおいてはそれが、一國民——もしくは抽象の人類——について見ると、彼の生産は彼の消費だ、といつた風な形をとつてゐる。ストルヒはセイの誤謬を指摘し、たとへば一國民は彼の生産物を残らず消費するものでなく、生産手段、固定資本等をもつくり出してゐることを示した。加ふるに、社會を單一の主體と見るのは誤まつた觀察である——思辨的。一箇の主體にあつては、生産と消費とが一行爲の諸要因として現はれる。ただここで注意をひく重要な點としては、生産および消費を一體または個々の個人の活動として觀察するなら、兩者はつねに一過程の諸要因として現はれ、その過程では生産が現實の出發點であり、それ故にまた支配的な要因でもある、といふことである。必要として、欲望として、消費はそれ自身、生産的活動の内部的な要因ではあるが、しかし生産的活動は實現の出發點であり、従つて實現の支配的要因であつて、全過程がふたたび續行されてゆくところのその行爲である。個人は一つの對象を生産し、その消費によつてふたたび自己にもどり来るが、いまや生産的個人として、自分自身を再生産するものとしてもどり来る。消費はかやうに、生産の要因として現はれる。

だが、社會においては、生産者の生産物に對する關係は、生産物が出來あがると同時に、外部的な關係であつて、生産物のはたして該主體の手に歸するかどうかは、彼が他の諸關係に對する關係で定まる。生産物は直接、生産者に所有されない。また、彼が社會において生産する時、生産物の直接の我物化が目的なのでもない。生産者と生産物との間に分配がはいり、それが生産物の世界の彼の分け前を、社會的法則に従つて決定する。すなはち、生産と消費との間に分配がはいる。

では分配は、獨立の分野として、生産とならんで生産の外に立つのか？

B 生産と分配 普通の經濟學を見てまづ氣づかねばならぬことは、そこではすべてが二重に扱はれてゐることである。たとへば分配では地代、勞賃、利子、利潤が現はれると同時に一方、生産では土地、勞働、資本が生産の能因として現はれる。資本に至つては、それが、(一)生産能因として、(二)所得源泉として、二重に扱はれてゐることは、初めから明白である。利子と利潤とは、決定的な特定の分配形態として「現はれ」、それ故に生産においてもまた、かかるものとして現はれる——それらが資本の増大、増殖の形態、すなはち資本の生産そのものの要因であるかぎりにおいて。分配形態としての利子および利潤は、生産の能因としての資本を豫想する。それらは、生産能因としての資本を前提とするところの分配方法である。同時に、それらは資本の再生産方法でもある。

同様に勞賃は、異なる項目下で觀察された賃勞働である。勞働が後者において生産能因としてもつ確定は、「前者にあつては」分配規定として現はれる。勞働が賃勞働として決定されてゐなかつたなら勞働が分配に參與する方法が、勞賃として現はれはしないであらう——たとへば奴隸制度においてのやうに。最後に地代だが、土地所有が、生産物の分け前を得る分配形態の中でもやはり最高のものをとるなら、地代は大土地所有（本來は大農業）を生産能因として前提するのであつて、勞賃が單なる勞働を前提しないのと同じく、單なる土地を前提してはゐないのである。分配關係および方法は、それだから、生産諸能因の反面としてのみ現はれる。賃勞働の形において生産に參與する個人は、勞賃の形において、生産物、生産の成果に參與する。分配の編制は、完全に生産の編制によつて規定されるのである。分配はそれ自身生産の一所産である。ひとり對象の點において、生産の結果のみが分配されるといふ點において、しかるのみでなく、また形態の點において、生産參與の特定の形態が特種の分配形態、すなはち分配にあづかれる形態を決定するといふ點においても、さうである。で、生産の方には土地を、分配の方には地代をおく等、等は、悉く錯覺である。

* 草稿には「生産」とある。

生産ばかりを見てゐたといふ非難を、まづ先にあびせられるリカード¹その他の經濟學者らは、この故に、ひとへに分配のみを經濟學の研究對象と定めてゐるのである。けだし彼らは、教訓的にも、分

配形態こそは、生産諸能因が一定社會で自身を定着させる表現の、最も明確なるものだとしてゐたから。個々の個人に對しては、分配はおのづから、彼が携はりをる生産の内部における彼の地位を規定するところの社會的法則として現はれ、分配は従つて生産に先行する。この個人は、初めから一の資本も土地財産も持たない。社會的分配によつて、彼は生まれた時から賃勞働に割り當てられてゐる。が、しかしこの割り當てそのものは、資本や土地財産が獨立の生産能因として存することの結果である。全體の社會を見ても、分配はなほ一面では生産に先行し、生産を規定するかに見える——あたかも經濟前の事實かのやうに。一の征服民族は、征服者間の土地分配を行つて、もつて土地財産の特定の分割と形態とをもちこみ、従つて生産を規定する。ないしはまた、被征服者を奴隸と化して、もつて奴隸勞働を生産の基礎たらしめる。或ひはまた一國民は、革命によつて大土地所有を細分し、そこでこの新分配が生産に新しい特性を與へる。或ひはまた立法が、大家族の土地所有を永久化したたり、勞働を世襲的特權として分配して、もつてカストのごとくしたりする。

これらすべての場合において、そしてそれらはみな歴史的事實であるが、そこでは分配が生産を通してではなく、むしろ反對に生産が分配を通して編制され、規定されるかに思へる。

最も皮相的にみた分配は、生産物の分配として現はれ、従つてそれだけ生産から遠ざかり、生産に對して準獨立的である。しかしながら、分配は生産物の分配である前に、まづ、(一)生産手段の分配

であり、次には(二)——これは前者の關係の一步進んだ規定であるが——各種の生産に向つての、社會成員の分配(特定の生産諸關係に諸個人を服屬させること)である。生産物の分配は、いふまでもなく、この生産過程そのものの内部に含まれて、生産の組成を規定するところの、分配の結果である。この生産のうちに包有される分配から切り離して生産を見るのは、明らかに空虚な抽象であり、同時に一方、生産物の分配なるものは、本源的に生産の一要因を形づくるところのこの分配とともに、ひとりてに生ずるのである。近世の生産をば、その特定の社會的組成において把握せんと欲したリカアドー、かつはまた、最も卓越せる生産の經濟學者たる彼は、まさにこの理由からして、生産ではなしに却つて分配を、近世經濟學本來の研究主題として宣言するものである。ここでもまた、分配の領域に歴史を封じつつ、恒久の眞理として生産論を展開させる經濟學者らの、野暮さ加減を見ることが出来る。

この生産そのものを規定する分配が、生産に對していかなる關係をとるか、明らかに、生産自體のうちに屬する問題である。で、もし生産が生産要具の一定の分配に依存する場合には、少くとも、この意味の分配は生産に先行し、その前提をなすのだといふならば、これに對して吾々は、事實において生産は、生産の諸要因を形づくるところの、それ自體の諸條件と諸前提とをもつのであると答ふべきである。それらは、起原において、自然生長的であるかも知れぬ。が、それらは、生産そのもの

の過程を通して、自然生長的なものから歴史的なものに轉化され、一つの時代には生産の自然的前提として現はれても、他の時代には生産の歴史的成果であつた。それらは生産自體の内部において絶えず改變される。たとへば、機械の使用は、生産物の分配とならんで生産要具の分配をも變化する。そして近代の大土地所有そのものは、近代商業と近代工業との結果でもあるが、また近代工業が農業に適用された結果でもある。

以上において投げられた諸問題はみな、結局、一般に歴史的諸關係はいかに生産の中へ作用してゆくか、また歴史の運動一般に對する生産の關係はどうか、といふことに歸着する。これは明らかに、生産そのものの分析と展開とに屬する問題である。

それにしても、以上に投げられたやうな瑣々たる形においてなら、問題はそれ相應に手短かに片づけられる。あらゆる征服には三通りの形が可能だ。征服民族が自分自身の生産方法の下に被征服者を屬從させる(たとへば今世紀のアイルランドにおける、およびある程度まではインドにおける、イギリス人の場合のごとき)か、もしくは、被征服民族の在來の生産方法を存続させつつ征服者は貢物を得て満足する(たとへばトルコ族やローマ人の場合のごとき)か、もしくはまた、そこに相互影響が働いてもつて新しい方法が、一つの綜合が、成立する(ゲルマン族の征服運動におけるある程度までの事實)。どの場合でもみな生産方法は、それが征服民族のものであれ、被征服者のものであれ、また兩者の融合から生

まれくるものであれ、新しく行はれる分配にとつては決定力をもつ。この分配は、新しい生産の時代にとつての前提として現はれるとはいへ、それ自身さらに生産の所産であり、ひとり歴史的生産一般の所産たるのみならず、また特定の歴史的生産の所産でもある。たとへばロシアにおいて、荒廢を事としたモンゴール族は、彼らの生産に相應して行動したもので、生産には廣大無住の原野を主要條件とする放牧場を必要としたのであつた。ゲルマン蠻族にとつては、農奴による農業が傳統的生産であり、それは田園の孤立的生活を意味したが、彼らはローマの諸州をかかると同時に、一層たやすくそれをなせる土地所有の集中が、すでに古き農業組織をば全く覆へしてゐただけに、一層たやすくそれをなした。ある時代には、人は掠奪によつてのみ生活したものだ、とは周知の傳統的觀念である。だが、掠奪しうるためには、掠奪される何ものかがあるべきところになければならぬ——すなはち生産が。そして掠奪の方法は、それ自身さらに生産の方法によつて規定される。たとへば、發達した取引所投機を有する國民は、牛飼ひの國民とおなじ方法で掠奪されるわけにはゆかない。

* これを「資本論」(第三版)五二頁の脚註三三と比較せよ。「古代のギリシア人およびローマ人は、掠奪によつてのみ生活したかに想像してゐるパスチア君は、まことに滑稽である。幾世紀かにわたり人が掠奪によつて生活するといふなら、そこには絶えず掠奪すべき何ものかがあるか、さもなければ掠奪の對象物が不斷に生産されねばならぬ。」
** 草稿の原文には“Stockjobbing nation”とある。

奴隸の場合には、生産要具が直接に掠奪される。だがその場合には、掠奪する方の國の生産は、奴

隸労働が行はれるやうに編制されてをらねばならず、さもなくば、(南アメリカ等におけるごとく) 奴隸制度に適應した生産方法が作り出されねばならぬ。

法律は、生産要具たとへば土地を、一定の家族の永久的所屬たらしめることが出来る。かかる法律は、たとへばイギリスの場合のやうに、大土地所有が社會的生産に適合せる時にのみ、經濟的意義を得る。フランスにおいては、大土地所有にもかかわらず小農業が行はれたもので、前者もしたがつて革命によつて細分された。ではたとへば、法律によつての土地細分の永久化はどうか？ その種の法律にもかかはらず、所有地はふたたび集中される。分配關係の確保におよぼす法律の效果、およびそれを通して生産におよぼす法律の影響については、別に論定するはず。

C 交換と流通 流通はそれ自身、交換の特定要因にすぎないか、ないしはまた總體として觀察された交換である——交換なるものが、生産と、生産によつて決定され消費を伴ふところの分配と、の間に介在する媒介的要因であるかぎりには、が、また、消費自身が生産の一要因として現はれるかぎり、交換もまた明らかに、その要因として生産のうちに含まれる。

まづ明らかなのは、生産自體のうちに生ずるところの、活動および能力の交換は、直接に生産に所屬してそれを本質的に形づくることである。第二に、同じことは、生産物の交換についてもいへる——交換が、直接消費にきまつた完成態の生産物の調達の手段であるかぎりにおいて。その限りで

は、交換自體は生産のうちに含まれる行爲である。第三に、いはゆる商賣人同士の交換は、その組織の點でも全然生産によつて規定されるが、それ自身がまた生産する活動でもある。交換は、生産物が直接に消費のために交換されるころの、その最後の段階においてのみ、生産に依存せず生産にかはりなきものとして現はれる。けれども、(一)交換は分業なしには存在せぬ、その分業が自然生長的のものにせよ、またそれ自身すでに歴史的成果たるにせよ。(二)私的交換は私的生産を前提する。(三)交換の頻繁さは、そのおよぶ範圍や様式とあなじやうに、生産の發達および編制によつて決定される——たとへば都市と田園間の交換、田園での交換、都市内の交換、等、等。かくて交換は、そのあらゆる要因において、生産のうちに直接に含まれてか、ないしは生産によつて規定されて現はれる。

* 草稿には "sogenannte Exchange Zwischen dealers und dealers" とある。マルクスはここでは大方、以下のごときアダム・スミスの一章を頭においたものであらう。「一國の流通は二つの異なる部分にわかれる。商賣人同士の間の流通と、商賣人と消費者との間の流通とがそれである。」(「國富論」第二卷、第二章)。ここで「商賣人」とは商人や小賣人に限らず、生産者をも含むのである。

吾々の到達した結果は、生産と分配と交換と消費とが同一であるといふことではなく、それらはみな一總體の諸成員を形づくり、一箇の統一態のうちの諸差別を形づくる、といふことである。生産は、對立的に規定されたるそれ自身を律制するとともに、また他の諸要因をも律制する。過程はつねに新たに生産から始まる。交換と消費とが律制的に働きえないことは自明である。おなじことは、生産物

の分配としての分配についてもいへる。生産能因の分配としての分配なら、それ自身生産の一要因である。生産の特定「形態」は、かくて消費、分配、交換の特定「形態」を規定し、かつ、これらのさまざまな要因相互間の特定關係を規定するのである。もつとも、生産は、そのかたよつた形態においてなら、他の諸要因によつて規定される。たとへば、市場すなはち交換の範圍が擴がると、生産は規模において増大し、一層こまかく分業化する。

分配の變化とともに生産が變化する。たとへば、資本の集積とともに、都市と田園間の人口分布の異なるとともに、等。最後に、消費の欲望が生産を決定する。で、種々なる要因のあひだに交互作用が起る。これはあらゆる有機的一全體においてさうである。

(三) 經濟學の方法

與へられた一國を政治經濟的に觀察する際には、吾々は、その人口、人口の、階級的分布、都市、農村、海洋、および各種の生産部門への分布、輸出と輸入、年生産と年消費、物價、等から始める。現實なる前提の實在的のもの、具體的のものから始めること、たとへば經濟學においては、全社會的生產行為の基礎であり主體であるところの人口から始めることが、正しいかに思はれる。が、しかしよく考へると、その誤まれることがわかる。人口といつても、たとへばそれを構成する諸階級を度外視すれば、人口は一つの抽象である、この階級なるものもまた、それが基づくところの要素、たとへば賃労働、資本、等を知らなければ、空語にすぎない。これらがさらにまた、交換、分業、價格、等を豫想する。たとへば資本は、賃労働がなく、價値がなく、貨幣、價格等がなければ、何ものでもない。でもし私が人口から始めたとしたら、それは混沌たる全體の觀念であるだらう。そこで私はより立ちいつた規定によつて、分析的にいよいよより單純な概念へと近づいて行く。觀念されたる具體物からますます稀薄な抽象物へと進んだ私は、遂にこの上もなく單純な諸規定に到達してゐるだらう。そこで、そこから引きかへして歸路の旅をつづけるなら、私は遂にふたたび人口の前に立つてあらう。が

今度はしかし、混沌たる一全體の觀念としての人口の前にはなく、多數の規定および關係の豊富な一總體としての人口のである。第一の路は、經濟學が自己の生成に際して歴史的にとつたところのものである。たとへば十七世紀の經濟學者らは、つねに人口、國民、國家、諸國家、等、生ける全體から始めた。が、彼らはいつても、分析によつて二三の規定的な抽象的一般關係、たとへば分業、貨幣、價値等を見つけ出すことに終つてゐる。これらの個々の要因が、多かれ少かれ、見定められ抽象されるやいなや、労働、分業、欲望、交換價値等の單純なものから出發して、國家、諸國民の交換、世界市場、等へよち登りゆく經濟學體系が創まつた。いふまでもなく、後者が、科學的に正當な方法である。具體的なものは、それが多數概念の包括なるが故に、すなはち雜多の統一なるが故に、具體的なのだ。だから具體的なものは、現實なる出發點であり、また從つて直觀と觀念との出發點であるとはいへ、思考上では、それは包括の過程として、結果としてこそ現はれるが、出發點としては現はれぬ。第一の路においては、全的な觀念が揮發させられて抽象諸概念となり、第二においては、抽象諸概念が思考の道を通つて具體物の復生産へと導かれる。それでヘーゲルは一の錯覺に陥り、實在的のものは、自己包括的、自己深化的、かつ自己自動的なる思考の結果であると考へた。しかるに、抽象物から具體物へとよちのぼる方法は、思考が具體物を我物とする仕方、それをば具體的なものとして心的に復生産する仕方である。が、どのみちそれは具體物それ自身の生成過程ではない。最も單純な經濟

的範疇、たとへば交換價值は人口を假定し、特定の諸關係において生産する人口を假定し、特定種の家
族、共同團體、國家等をも假定する。交換價值は、すでに與へられてゐる具體的な生ける全體の、抽
象的一面的な關係としてのほかは、決してありえない。

これに反して範疇としてなら、交換價值は、ノア洪水前からの存在となる。だから、意識にとつて
は——そして哲學的意識は、それにとつては理解する思考が現實の人間で、理解されたる世界自體が
現實の世界であるやうに出來てゐる——、だから意識にとつては、諸範疇の運動が、現實の生産行爲
——それはあいにく(?)外部からのみ刺激を得る——、實に世界がその成果であるところの、現實
の生産行爲として現はれる。そしてそれは——ここでもまた異語同義になるが——、思考總體として
の具體的總體は、一つの思考具體物として事實上、思考の、理解の所産である、といふかぎりでは正
しいのである。が、かかる總體は決して、直觀と觀念との外または上にあつて思考する自己分曉的な
概念の所産ではなく、却つて、直觀および觀念の諸概念へのつくり上げである。頭の中に思考全體と
して現はれるがごとき全體は、自己にとつて唯一可能なる仕方で世界を我物化するところの、思考す
る頭の所産であり、その仕方は、藝術的宗教的實際的精神的に、この世界を我物化する仕方とは違ふ。
眞實の主體は、依然として頭の外に、その獨立性において存立する——すなはち頭が單に思辨的に、理
論的にのみ働いてゐるあひだは。で、「經濟學」理論的方法の場合でも、その主體が、社會か、前提

としてたえず想像に浮かんでをらねばならぬ。

だが、これらの單純な範疇はまた、より具體的な諸範疇に先立つて、獨立の歴史的ないし自然的存
在をもつのではないか? それは意味次第だ。たとへばヘーゲルがその法理學をば、主體の最單純な
法律的關係として、占有から始めるのは正しい。が、しかしどんな占有も、それに比すれば遙かに具
體的な關係であるところの、家族や支配從關係に先立つて存在するものでない。これに反して、ま
だ占有するだけで所有權はもたない家族や部族團體が存在するといふのなら正しからう。すなはち、
その單純な方の範疇は、所有權との關係における單純な家族ないし部族團體の關係として現はれる。
この範疇は、發達しない方の社會においては、發達した有機體の單純な方の關係として現はれるのだ
が、占有をばその結びつきとするところの具體的な主體は、しかし、つねに豫提されてゐる。吾々は
占有する孤獨蠻人を考へることは出來る。が、その場合の占有は法律關係ではない。歴史的に占有が
家族へと發展したとするのは間違ひである。占有こそが却つて、つねにこの「より具體的な法律範疇」
を含蓄する。それにしてもこれだけのことはいへよう——單純な諸範疇は、未發達な具體物が、いま
だより多方面な結びつきを、ないしは、より具體的な範疇に心的に表現されてゐるところのより多方
面な關係を、設立せぬうちに、すでに自己を實現してゐるでもあらう諸關係の表現であるし、同時に
一方、より發達した具體物は、その複雑な範疇を副次的な關係として維持するものだ、と。

資本が存在せず、銀行が存在せず、賃労働が存在しなくても、貨幣は存在することが出来、また歴史的に存在した。だからこの方からすれば、單純な方の諸範疇は、比較的未發達の一全體の主勢的な諸關係を表現しうるもので、それらの關係たるや、當の全體がいまだより具體的な範疇に表現されてゐるやうな方向へ發展しなかつたうちに、すでに歴史的に存在したものだ、といふことが出来る。

その限りでは、單純から複雑へとよぢのぼる抽象的思考の法則は、現實の歴史的過程に應當する。

他方ではかういふことが出来る。何ら貨幣のごときものが存在しないにもかかわらず、協業や發達した分業のやうな經濟の最高諸形態が存在するところの——たとへばペルーのごとき、非常に發達はしてゐるが、しかも歴史的には成熟しない社會形態がある、と。

で、また、スラヴの共同團體の場合には、貨幣とこれを條件づける交換とが、個々の團體の内部では行はれず、ないしはごく僅かしか行はれないで、かへつて、その境界で他との交易において行はれる。これで見ても、共同團體の中へ本來の構成要素として交換を嵌めこむことは、一般に間違つてゐる。交換はむしろ、最初は異なる共同團體相互の接觸において行はれるので、同一團體内の成員相互においてではない。さらにまた貨幣は、極めて古くから到るところで一つの役割を演じてゐるとはいへ、古代にあつてはそれが、主勢的な要素として現はれてゐるのは、僅かに一方的に發達した國民、商業諸國民のみにおいてであつて、そして最高文化古代においてさへも、ギリシア人およびローマ人

にあつては、近代ブルジョア社會において前提されてゐるやうな充分なる貨幣の發達は、ただ彼らの没落期に現はれてゐるだけである。すなはち、この種の極めて單純な範疇は、歴史的には、社會の最高發達状態において始めて、その強度態をもつて現はれる。どのみち、すべての經濟關係が透徹的(?)であるわけではない。たとへばローマ帝國では、最大の發達に到達した際に、現物税と現物給附とがいまだやはり基本をなしてゐた。貨幣制度はそこでは一體、軍隊においてだけ完全に發達してつたので、いまだかつて労働の全體に喰ひこんではゐなかつた。

で、單純な範疇は、より具體的なものに先立つて歴史的に存在しえたにもせよ、その充分なる内部的および外部的發達においては、まさにそれは結合的(?)社會にのみ屬しうるもので、同時に一方、より具體的なもので、比較的に發達しない社會形態において充分に發達してゐたものがあるのである。

労働はごく單純な範疇である。かかる一般性においての——労働一般としての——その觀念もまた極めて古い。とはいへ、經濟上にかかる單純さにおいて把握されたものとしてなら、「労働」は、當の單純なる抽象をつくり出すところの諸關係が近代的範疇であると同じやうに、近代的な範疇である。たとへば貨幣經濟學派はなほ、富をば全然客體的に、貨幣における物(?)として表はしてゐる。この立場に對比すれば、製造工業ないしは商業學派が、富の源泉をば物から人の活動——工業的および商業的労働——へ移したのは、一大進歩であつた。が、かかる活動そのものは、いまだ單に貨幣を得

るものとしての限られた意味にとられてゐた。この體系に對して、重農體系は「さらに一進歩」で「ある」。それにおいては、労働の一特定形態——農業——が富をつくり出すものとされ、そして富そのものは、もはや貨幣の假装をつけずに生産物一般として、労働の一般的成果として現はれた。が、しかし、いふところの生産物は、活動に關する限定に對應して、まだやはり自然が決定する生産物に限られてゐた。農業が生産し、何ものにも増して土地が生産する。で、富をつくり出す活動についての限定を一つ残らず撤去して、工業でも商業でも農業でもなく、またそれとこれを問はず、單に労働たるをもつて足る「としたのは」、アダム・スミスのすばらしい進歩であつた。富をつくる活動の抽象的一般性ととも、今や吾々は、富として規定される事物の一般性、生産物一般、もしくはふたたび労働一般を、だがそれを對象化された過去の労働として、もつのである。この過渡がいかに困難であり、著大であつたかは、いかにアダム・スミスが時々または重農體系へ逆行するかを見れば明らかである。が、それにしても結局、それは人類が——どんな社會形態においても——生産する者として現はれる際の關係中の、最も單純でかつ最も原始的な關係の、抽象的な表現が見出されたものにすぎないかのやうにも思へる。一面からはその通りだ。他面からはさうでない。

この二字が判讀しかねる。"unvergleichlich"とあるまうに見えるが。

労働の種類方法に對する無關心は、どの一種でもがもはや、他のすべてに優越するやうなことのな

い現實の労働諸分科の、極めて發達した總體を前提とする。だから、最も一般的な諸抽象は一般に、最も豊富な具體的發達の場合、一が多と共同に、すべてと共通に現はれる場合にのみ成立する。かかる場合には、ある特殊の形態においてのみ考へられうる、といふことがなくなるのである。他方において、この労働の抽象は、一般に、諸々の労働の具體的總體の結果として始めてあるものにすぎない。特定の労働に對する無關心は、社會内の個々人が容易に一の労働から他の労働へ移行行き、特定種の労働なるものは彼らにとつて偶然的であり、従つてどうでもよい、といふ風な社會形態に相應するものである。労働はここでは、範疇においてのみならず、また現實においても富一般の造出の手段となつてをり、定則として個人と結びついて特殊化するやうなことがなくなつてゐる。かかる事態は、ブルジョア社會の最近代的存在形態——北米合衆國——において最も發達してゐる。すなはちここで始めて、近世經濟學の出發點たる「労働」、「労働一般」、形容句ぬきの労働の範疇の抽象が、實際的に眞實となるのである。すなはち、近世經濟學がまつ先に押し立てるところの、そして最も古くしてかつあらゆる社會形態に通用する關係を表はすところの、最單純な抽象は、實はこの抽象においてのみ、最近代社會の範疇として實際的に眞實に現はれるのである。人は或ひは、合衆國においては歴史的產物として現はれるところのものも、たとへばロシア人においては——すなはちこの特定種労働への無關心が——自然生長的な素質として現はれる、といふかも知れぬ。だがまづ、野蠻人がどんな労働に

も用ひられる素質をもつといふのと、文明人がみづからどんな労働にでも自分を用ひるといふのでは、恐ろしい違ひがある。それにまた實際上、ロシア人の場合には、さうした労働の決定に對する無關心に應當するものとして、ある全然きまつた労働への傳統的な没入があるのであつて、そこからはただ、外よりの勢力によつて投げ出されるばかりなのである。

この労働の例は、最も抽象的な範疇さへが、あらゆる時代に對する通用性——まさにその抽象性の故でのそれ——にもかかはらず、この抽象の確定性の點では等しく歴史的諸關係の産物であつて、その充分な適用性はこれらの關係にとつてのみ、かつ、その内部においてのみ存することを、決定的に示すものである。

ブルジョア社會は、最も發達し、最も多様化した歴史的生産組織である。その諸關係を表現する諸範疇は、その編制の理解は、同時に該社會をして、滅亡した過去の社會形態すべての編制と生産諸關係とを洞察せしめる。ブルジョア社會は、これらの社會形態の破砕片と諸元素との上に築かれ、その一部はなほ克服されぬ殘物として前者の中に餘命をつなぎ、一部は單なる暗示だつたものが完成した意義にまで發展して來てゐる、等、等。人體の構造を知ることが、猿のそれを知る鍵である。低級動物のうちに見られる高級動物への暗示は、高級動物そのものがすでに識られてゐる時にのみ理解される。ブルジョア經濟は、古代經濟その他への鍵を與へる。が、どのみちそれは、すべての歴史的差異

を滅却して、すべての社會形態の中にブルジョア社會を見るところの、經濟學者らのそのやうな仕方においてではない。地代を知る時に吾々は、貢物や十分一税などを理解する。が、吾々はそれらを同一物視してはならぬ。

さらにまた、ブルジョア社會そのものが、一つの對立的發展形態にすぎないのだから、以前の諸形態の諸關係は、しばしば全く萎縮してそこに見出されるにすぎないか、ないしは變にもぢられてゐる、たとへば自治體所有權のごとき。だから、ブルジョア經濟の諸範疇が、他のあらゆる社會形態にとつて眞なりといふのが本當だとしても、その意味はこれを加減してのみとるべきである。ブルジョア經濟は、自餘の諸形態をば發展させ、萎縮させ、漫畫化したりして、自身のうちに含みうるが、それらはつねに本質的に異なるものとなつてゐる。いはゆる歴史的展開なるものは、概して、最近の形態が過去の諸形態をば自己への段階として觀察して、つねに一面的に理解する、といふことに歸する。なぜなら、最近の形態は、まれにそしてただ極めて限定した條件の下にのみ、自己を批判しうるから。——もちろんここでいふのは、それ自身すでに崩壞期にあるやうな歴史的時代についてではない。キリスト教が、それ以前の諸神話の客觀的理解を助けうるに到つたのは、やうやく、キリスト教の自己批判がある程度まで——いはば主動的に出てきた時からである。で、またブルジョア經濟は、ブルジョア社會の自己批判が始まつた時に始めて、封建の、古代の、東洋の社會を理解するに至つた。ブルジョア經濟

が、また自己と過去の諸經濟とを、神話的に全然(?)同一化さなかつたあひだは、以前の社會、わけてもブルジョア社會がなほ直接に闘はねばならなかつた封建「社會」に對するその批判は、キリスト教が異教に、ないしはまた新教が舊教に向けたところの批判に似てゐた。

總じていづれの歴史的社會科學にあつてもさうであるやうに、經濟的諸範疇の歩みにあつても、つねに銘記さるべきことは、現實の中と同じく、頭の中にもまた主體が與へられてをり、ここでの主體は近世ブルジョア社會であること、従つて諸範疇は、この特定の社會、この特定の主體の各生存形態、各存在規定を表現し、かつしばしばその個々の側面を表現するにすぎないこと、そして「經濟學は」それだから科學としてもまた決して、それがかかるものになつたといまいはれてゐる時に始めて起原するものではない、といふことである。このことは銘記されねばならぬ。なぜなら、それは同時に經濟學の分科の問題に關しても、直接に決定的重要さをもつから。

たとへば、地代から、土地所有から始めるぐらゐ自然なことはないかに思へる。けれど、土地所有は、あらゆる存在の源泉たる土地と結びついてをり、またいくらかでも確立された各社會の最初の生産形態——農業——と結びついてもゐるからである。が、これぐらゐ間違つたことはあるまい。あらゆる社會形態においては、特定の生産形態があつて、それがすべての生産形態に優越し、従つてその關係が自餘のすべての關係に、それぞれの地位と勢力とを割り當ててゐる。

それが普通の光であつて、自餘のすべての色はその光に浸され、それぞれの特性にしたがつて變色される。それは特種のエーテルであつて、そこに出現するあらゆる物の比重を定める。

一例として牧畜民族をとらう。(單なる狩獵、漁撈民はまだ、實際の發展がはじまる點に立つてをらぬ)。彼らにおいてはある種の耕作形態が、ちらばらなそれが、現はれて來る。土地所有はそれによつて決定される。それは共同的土地所有であり、該民族がなほ彼らの傳統を把持する程度の多少に應じて、多かれ少かれこの共同形態が維持されてゆく。たとへばスラヴ民族の土地所有がそれだ。定着的農耕の諸民族においては——この定着がすでに一大進歩なのだ——、古代および封建社會においてのごとくに定着的農耕が優越してゐるところでは、工業と、その組織と、工業關係の所有形態さへもが、多かれ少かれ土地所有的特質をもつてをり、「社會」は全く農業に依存すること古代ローマのごとくであるか、もしくは中世におけるがやうに、田園の諸組織をば都市において、都市的關係において、模造してゐる。中世においては資本そのものが——純粹の貨幣資本でないかぎり——傳統的な手工道具(具)その他として、この土地所有の性質を帯びてゐた。

草稿には "III" (それ) とある。

ア社會においてはその逆である。農業はますます單なる一産業部門と化し、そして全然、資本によつて支配される。地代にしてもおなじことだ。土地所有が支配してゐる一切の形態において

は、なほ自然關係が優越する。資本が支配するところの諸形態においては、歴史的につくり出された社會的な要素が重きをなす。資本なくして地代は理解されえないが、地代がなくてもよく資本は理解される。資本は、ブルジョア社會の一切を支配する經濟力である。資本は起點でありかつ終點であらねばならず、そして土地所有に先立つて展開されねばならぬ。兩者を別々に觀察した上で、その交互關係が觀察されねばならぬ。

で、經濟的諸範疇をば、歴史的にそれが決定的であつた順序に従つて順次に扱ふことは、出來がたくもあり、間違つてもゐる。むしろ前後の順位を決定するものは、經濟的諸範疇が近代ブルジョア社會において相互的にもつところの關係であり、この關係は、それらの自然的關係と見られるものないしは、歴史的發達の順序に當るものちやうど反對である。問題になるのは、經濟的諸關係が種々なる社會形態の序列において、歴史的にされた地位ではない。ましてかの、歴史的運動の曖昧な(?)想像にすぎないところの「觀念における」(ブルードン)それらの順位などではなほさらぬ。そんなものではなくて却つて、近代ブルジョア社會の内部における經濟的諸關係の組成なのだ。

フェニシア人、カルタゴ人のごとき商業民族が、古き世界において見せたところのその純粹さ(抽象的明確さ)は、まさに農業民族自體の優越によつて與へられてゐた。商業資本もしくは貨幣資本としての資本が、あたかもかかる抽象において現はれるのは、資本がなほ社會の支配的要素たらざると

ころにおいてである。ロンバルド人、ユダヤ人は、同種の地位を、農業に従へる中世諸社會に對して占めた。

おなじ諸範疇が、種々なる社會的段階においてされた種々なる地位の實例としては、なほ次のごとくがある。ブルジョア社會の轉近形態の一つなる株式會社は、同會社の初期においては、特權的獨占的大貿易會社の形で現はれてゐる。

國富といふ概念は、十七世紀經濟學者の意識の中へ、こんな形で忍び込んでゐた——そしておなじ觀念が、一部分はなほ十八世紀經濟學者に至つても生き延びてゐた——、いはく、富はひとへに國家のためにつくり出されるものだが、國家の力はこの富に比例する、と。これこそは實に、富そのものとその生産とが、近代國家の目的として名乗りをあげ、國家は富の生産の手段にすぎずとなしたところのその、いまだ無意識的に偽善的な、表現形態であつた。

經濟學の分科は明らかにかうあるべきだ。第一に、一般的抽象的諸規定を展開「すべきだ」。それらは、だから、多かれ少かれすべての社會形態に當てはまるが、しかし上に闡明してゐた意味において。第二には、ブルジョア社會の内部的組成を形づくり、かつ基本的諸階級を基礎づけてゐるところの諸範疇。資本、賃労働、土地財産。それらの相互關係。都市と田園。三大社會階級。これらの階級の間の交換。流通、信用制度(私的)。第三には、國家の形態においてされるブルジョア社會の包括が

くる。それ自體との關係についての考察。「不生産的」諸階級。租税。國債。公的信用。人口。植民地。移住。第四には生産の國際的關係。國際的分業。國際的交換。輸出入。爲替相場。第五、世界市場と恐慌。

(四) 生産、生産手段と生産關係。生産關係と交通關係。生

産および交通關係との關係における國家および財産形態。法律關係。家族關係

ここに述べべきもので忘れてならぬ諸點についてのノート。

一、戦争は、平和よりも早くから發達してゐること。——戦争によつて、および軍隊内等において、賃労働、機械、等の若干の經濟關係が、ブルジョア社會の内部におけるよりも早くから發展「される」次第「について述べること」。生産力と各種の交通關係との關係もまた、軍隊においてとくに明瞭である。

二、從來の觀念的な歴史記述が、現實的なそれに対する關係。わけても、いはゆる文化史、古い宗教史および國家史。

その機會において、從來の歴史記述の種々なる方法についても、多少いつてよい。いはゆる客觀的、主觀的。(倫理的その他)。哲學的。

三、二次的および三次的のもの。一般に派生的な、移植的な、本源的でない生産諸關係。ここでは國際的諸關係の影響「が扱はるべきだ」。

四、この見解における唯物論に對する非難。自然主義的唯物論に對する關係。

五、生産力（生産手段）および生産關係の概念の辯證。それらの限界を決定すべき、しかも現實の差異を減却せざる辯證。

六、物質的生産の發達と、たとへば藝術的發達との不等關係。一般に、進歩の概念は、普通に行はれる抽象において解さるべきでない。藝術等の場合には、この不均衡を理解することは、實際的社會的關係そのものの内部におけるそれ——たとへば、北米合衆國の教育關係のヨーロッパに對するそれ——を理解することほどに、重要でも困難でもない。ここに闡明さるべき眞に困難なる點は、むしろ、どうして生産關係は法律關係として不等の（？）發達においてあらはれるか、である。すなはち、たとへばローマ私法（刑法および公法にあつてはそれほどでない）の近代的生産に對する關係のごとき。

七、この見解は、必然的發達として現はれる。が、しかし偶然を是認。雜*（自由およびなほその他のこと）。（交通機關の作用）。世界史は元來、つねにかならずしも世界史「的」成果としての歴史の形をとらなす。

* 草稿には "and" とある。

* 草稿には "and" とある。

八、出發點はもちろん自然的確定「にあるべきだ」。主觀的に、客觀的に、部族、種族等。

藝術の場合には、その特定の黄金時代が、當の社會の一般的發達とも、またその物質的基礎、いはばその組織の骨格の發達とも、何の關係もないことはよく知られてゐる。たとへば近代藝術、ないしはシェイクスピアと比較したギリシア藝術である。また藝術のある形態のもの、たとへば史詩のごときについては、それらは藝術生産としての藝術生産が出現すると同時に、もはやその世界劃期的な古典の姿においてはつくられえない、といふこと、すなはち、藝術そのものの領域内において、その重要な形式のあるものは、藝術的發達の低い段階においてのみ可能である、といふことさへも認められてゐる。で、藝術の領域内の種々なる藝術形態の關係において、すでにさうなのだとすると、藝術の全領域が、社會の一般的發達に對する關係においてさうであるのは、なほさら驚くに足らぬことになる。困難はただ、この矛盾の一般的解釋に存する。が、それが特殊化されると同時に、すでにそれは説明されてゐる。一例としてまづ、現代に對するギリシア藝術の關係を見、次にシェイクスピア藝術の關係を見よう。ギリシアの神話が、ギリシアの藝術の工廠であるのみならず、また土壤であつたことは知られてゐる。ギリシア人の空想の、從つてギリシア藝術の、根本に横たはる自然觀と社會關係とが、自動的な機械と鐵道と機關車と電信との時代に可能であらうか？ ロバート會社が現はれてヴァルカンはどこに残る？ 避雷針の前にジュビターは？ そして動産信用の前にヘルメスは？ あらゆる神話は、想像において、想像によつて、自然力を征服し、支配し、像づくる。だからそれは、

自然力に對する現實の支配が生ずるとともに消滅する。プリンティング・ハウス・スクエア^{*}とならんでフェーム^{**}はどうなる？ ギリシア藝術は、ギリシアの神話を前提する。すなはち、それ自身すでに民族空想によつて、知らず知らず藝術的な仕方で作された自然および社會形態を前提する。これがその材料なのだ。どんな神話でもいいのではない。どんな、知らず知らず藝術的な、自然の製作でもないのではない。（ここではあらゆる對象を、従つて社會を「も」含む）。エジプトの神話は決して、ギリシア藝術の土臺や母胎でありえなかつた。が、どのみち「それは」どれかの神話「でなければならなかつた」。で、どのみち自然に對するあらゆる神話的な關係、自然に對するあらゆる神話化の關係から切り離された社會發達が、従つて神話に依存せざる空想を藝術家に求めるやうな社會發達が、「ギリシア藝術の土臺を形づくることは出来なかつたのだ」。

* 「ロンドン・タイムス」の印刷所のあるところ。

** 風聞の女神。

他方において、アキレスは火薬や彈丸とともにありえたか？ ないしは總じてイリアッドは、印刷器や印刷機械とともにありえたか？ あの朗詠と吟誦と瞑想とは、印刷機の堅棒の前に必然に熄まなうといふのか？ すなはち、あの史詩にとつての必須條件が消滅しないといふのか？

が、困難は、ギリシア藝術および史詩が、ある社會的發達形態と結びついてゐるのを理解すること

にあるのではない。困難は、それらが今もなほ我らに藝術的享樂を與へ、かつある點では規範として、また及びがたい模範として通るのを「何と解するか」にある。

大人は二度と子供にはなれぬ——子供みたくになりでもせねば。が、子供の純眞は彼を喜ばせ、彼はさらにその眞實を、より高き平面に復生産しようと自ら努めないであらうか？ 少年性のうちにこそどの時代でも、それ自身の特性が自然的眞實において蘇へりはせぬか？ 人類が最も麗しく開展されてゐる人類の社會的幼年時代が、二度と返らぬ段階として、なぜ永遠の魅力を發揮してはならぬといふのか？ 育ちの悪い子供があり、早熟な子供がある。古い民族にはこの範疇に屬するものが多い。ギリシア人は、順當な子供らであつた。彼らの藝術が吾々の上にもつ魅力は、それを生ひ立たせてゐる未發達な社會段階と矛盾するものではない。魅力はむしろ後者の結果であり、未成熟な社會的諸條件——その下にあの藝術がなりたち、その下にのみなりたちたところの——が、二度とよたた歸らぬことと離れがたく結ばれてゐる。（ここで草稿が切れてゐる）

引用文献目録

(各欄末尾の数字は本書の引用頁を示す)

- アークハート、デーヴィッド「親しき言葉」 Familiar words as affecting England and the English, ロンドン, 1856. —72
- アットウッド、タマス「通貨問題, ゲミニ文集」 The Currency Question, the Gemini Letters, ロンドン, 1844. —82
- アテナユス「晩餐における學者」 Deipnosophistarum libri quindecim, 第四卷, シュヴァイグホイザー編, 第二版, ストラスブルグ, 1802. —68
- アリストテレス「政治學」 De Republica, ベッケリ編, オクソニア, 1837. —3, 26, 39, 131, 159
- ウキルスン, ジェームス「資本, 通貨および銀行」 Capital, Currency and Banking, ロンドン, 1847. —217, 230
- エンゲルス, フリードリッヒ「イギリスにおける労働階級の地位」 Die Lage der arbeitenden Klasse in England, ライプツヒ, 1845. —序5
- オブダイク, ジョージ「經濟論」 A Treatise on Political Economy, ニューヨーク, 1851 —103
- ガリアニ, フェルディナンド「貨幣論」(1750)「イタリ-經濟學の古典的文献, 近世の部」第三卷所収 Della Moneta, In: Scrittori Classici Italiani di Economia Politica. Parte Moderna. Band III, クストデイ編, ミラノ, 1803. —15, 49, 67, 92, 113, 182
- ガルニエ, ジェルメン「上代からの貨幣の歴史」 Histoire de la monnaie depuis les temps de la plus hante antiquité jusqu'an Règne de Charlemagne, パリ, 1819. —69, 120
- カルリ「ヴェルリの『經濟學に關する諸考察』へのノート」 Noten zu P. Verri, "Meditazioni sulla Economia Politica", 「イタリ-經濟學の古典的文献, 近世の部」第十五卷所収, クストデイ編, ミラノ, 1804. —179
- クセノフォン「租税論」 De Vectigalibus, (クセノフォン保存文庫, 第六卷所収, I. V. ゴットロープ・シュナイダー編), ライプツヒ, 1815. —157, 159.
- クーパー, トーマス「經濟學原理講義」 Lectures on the Elements of Political Economy (コロンビア, 1820), ロンドン, 1831. —16
- グロム, ヤコブ「ドイツ言語史」 Geschichte der deutschen Sprache, ライプツヒ, 1854. —184
- グレイ, ジョン「貨幣の本質および有用に關する講義」 Lectures on the Nature and Use of Money, エディンバラ, 1848. —84, 85, 86

- 「社会組織、交換の原理に関する一論文」The Social System. A Treatise on the Principle of Exchange, エディンバラ, 1831. —84
- ケルナー, M.G. 「ボヘミアの鑛業の昔についての研究」Abhandlung von dem Altertum des böhmischen Bergwerks, シュネーベルグ, 1758. —185
- コベット, W. 「政治論」Political Register, 1807. —103
- コルベット, タマス 「諸個人の富の原因および態容に関する研究……」An Inquiry into the Causes and Modes of the Wealth of Individuals; or the Principles of Trade and Speculation explained, ロンドン, 1841. —103
- ジェノヴェジ, アントニオ 「市民経済教課」Lezioni di Economia Civile (1765) 「イタリ—経済学の古典的文献, 近世の部」第八巻所収。—141
- シモンデイ, J. Ch. シモンド・ド 「経済学研究」Etudes sur l'économie politique, 第二巻, フラッセル, 1837. —52
- シュタイン, ルドキヒ 「国家学の體系」第一巻 「統計, 人口政策および国民経済学體系」System der staatswissenschaft. Bd. I: "System der Statistik, der Populationistik und der Volkswirtschaftslehre", ストゥットガルトおよびテュービンゲン, 1852 —5, 16
- ステュアート, ジェームス 「経済学原理の研究, 自由国家の對内政策の科学に関する論文」An Inquiry into the Principles of Political Economy. Being an Essay on the Science of Domestic Policy in Free Nations (ロンドン, 1767), 第二版, ダブリン, 1770. —49, 76, 78, 194, 200, 201
- ストルヒ, アンリ 「経済学教程」Cours d'économie politique: ou exposition des principes qui déterminent la prospérité des nations, 第四巻, パリ, 1823. —130, 154 「国民的収入の性質についての考察」Considérations sur le nature du revenu national, パリ, 1824. —130
- スペンス, ウキリアム 「商業に依存せざる英國」Britain independent of Commerce; or proofs deduced from an investigation into the true causes of the wealth of nations, that our riches, prosperity and power are derived from sources inherent in ourselves, and would not be affected even though our commerce were annihilated, ロンドン, 1807. —103
- スミス, アダム 「諸国民の富の性質とその原因に関する一研究」An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 第一巻, (E. ウェークフィールド版), ロンドン, 1835/1839. —50, 260
- セヨル, ウキリアム・ナッソー 「経済学の基礎原理」Principes fondamentaux de l'économie politique, ジャン・アリヴァーヌ伯譯, パリ, 1836. —154, 168
- ソンプソン, ウキリアム・タマス 「富の分配の攻究……」Inquiry into the Principles of

- the Distribution of Wealth, most conducive to human happiness, applied to the newly proposed system of voluntary equality of wealth, ロンドン, 1827. —87
- ダリモン, アルフレッド 「銀行改革論」De la Reforme des Banques, パリ, 1856. —87
- テューク, タマス 「1839年—1847年の價格の歴史」A History of Prices and of the State of the Circulation from 1839 to 1847 inclusive, ロンドン, 1848. —217, 219, 230
- 「通貨原理論」An Inquiry into the Currency Principle; the connection of the currency with prices and the expediency of a separation of issue from banking ロンドン, 1844. —103, 230, 231
- ドット, ジョージ 「産業の驚異」Curiosities of Industry and the Applied Sciences, ロンドン, 1854. —120
- バークレイ, ジョージ 「質問者」The Querist, ロンドン, 1750. —16, 76, 132
- バーボン, ニコラス 「新貨幣の輕量鑄造に関する論文, ロッタ氏の考察に答へて」A Discourse concerning Coining the new Money lighter, in answer to Mr. Locke's Considerations about raising the value of money, ロンドン, 1696. —76
- ヒューム, ジェームス・デアコン 「穀物條例についての書簡」Letters on the Corn Laws, and on the Rights of the Working Classes, ロンドン, 1834. —219
- ヒューム, デヴィッド 「論説集」Essays and Treatises on Several Subjects, 第一巻, ロンドン, 1777. —194, 198
- ブカナン, デヴィッド 「ドクトル・スミスの研究の諸国民の富に扱はれた諸問題についての考察」Observations on the Subjects treated of in Doctor Smith's Inquiry on the Wealth of Nations etc., エディンバラ, 1814. —125
- プラト— 「共和国」De Republica, 第二巻 「交換の貨幣象徴」プラト—全集所収, G. ストールプミアス編, ロンドン, 1850. —130
- フラートン, ジョン 「通貨の調節について」On the Regulation of Currencies, being an examination of the principles on which it is proposed to restrict within certain fixed limits the future issues on credit of the Bank of England and of the other banking establishments throughout the country, 第二版, ロンドン, 1845. —231
- ブラン, ルイ 「フランス革命史」Der französischen Revolution, 第一巻 —201
- フランクリン, ベンジャミン 「紙幣の性質および必要に関する小研究」A Modest Inquiry into the Nature and Necessity of Paper Currency, (1729), フランクリン全集所収 J. スパークス編, ボストン, 1836. —46
- 「アメリカの紙幣に関する事實ならびに考察」Remarks and Facts relative to the American Paper Money, (1764), フランクリン全集所収 —46, 131
- アリウス, カユス・セクンドゥス 「博物学」Historiae Naturalis, (ハンブルグおよび

- ゴート, 1851) —152
- ブレイ, ジョン・F. 「労働虐待と労働救済」 Labours Wrongs and Labours Remedy, or the Age of Right, リーツ, 1839. —87
- ブレイク, ウィリアム 「政府の支出によつて生ずる諸結果の考察」 Observations on the Effects produced by the Expenditure of Government during the restriction of cash payments, ロンドン, 1823. —112, 219
- ベタイ, ウィリアム 「人類の増殖に関する論文」 An Essay concerning the Multiplication of Mankind etc., 1686. —41
- 「政治算術……」 Several Essays in Political Arithmetic etc., ロンドン, 1699. —41-42, 141, 149
- ベルニエ, フランソワ 「旅行記——大蒙古事情記」 Voyage contenant la description des états du Grand Mogol, パリ, 1830. —149
- ベーレー, S. 「貨幣およびその變遷」 Money and its Vicissitudes in Value; as they affect National Industry and Pecuniary Contracts: with a Postscript on Joint Stock Banks, ロンドン, 1837. —66, 168
- ペレイ, イサーク 「産業と財政」 Leçons sur l'Industrie et les Finances, パリ, 1832. —100
- ボアギューベール, ビエール 「フランス詳論」 (1697) 「経済學文庫」第一卷 「十八世紀の經濟財政學者」所收, Le détail de la France. In: Collection des principaux économistes. Bd. I: Economistes financiers du XVIII ième siècle, デイル版, パリ, 1843. —44, 101, 112, 144, 172.
- 「富の性質についての論考」 Dissertation sur la nature des richesses, de l'argent et des tributs etc., 「経済學文庫」第一卷 「十八世紀の經濟財政學者」所收 —44, 142
- ボザンケ, J. W. 「金銀, 紙幣, 信用通貨……」 Metallic, Paper and Credit Currency and the Means of Regulating their Quantity and Value, ロンドン, 1842. —103
- ホッチキソン, トーマス 「通俗經濟學」 Popular Political Economy, ロンドン, 1827. —39
- ホラーツ, フラックス 「諷刺詩」 Satirarum, 第二卷, (オペラ, オムニア所收, Fr. J. デーリング編, リアシアエ, 1824) (ウキルヘルム・ビンダーの獨譯あり, 鈔譯文庫第 62 卷), ベルリン, シェーネベルグ —153
- マカロック, J. R. 「經濟學の起源……」 Discours sur l'origine, les progres, les objets particuliers et l'importance de l'économie politique, ジュネーブおよびパリ, 1825 —16
- 「經濟學文獻, 分類目録」 The Litterature of Political Economy, a classified

- Catalogue of select publications in the different departments of that science, ロンドン, 1845. —41
- ▼クラレン, ジェームス 「通貨史」 A Sketch of the History of the Currency, ロンドン, 1858. —65, 203, 204
- ▼クレオド, ヘンリー・D. 「銀行の理論および實際——通貨, 價格, 信用ならびに交換の原理について」 The Theory and Practice of Banking: with the elementary Principles of Currency, Prices, Credit and Exchanges, 第一卷, ロンドン, 1858. —54, 167
- ▼ター, ビータ 「新世界について」 De orbe novo, Decades, アルカラ, 1516, 1530 パリシー, 1587. —183
- ▼ルクス, カール 「哲學の貧困」 Misère de la Philosophie. Réponse a la Philosophie de la Misère par M. Proudhon, パリおよびブラッセル, 1847. —序5, 54
- 「自由貿易論」 Discours sur la question du libre échange. —序5
- 「賃労働と資本」 Lohnarbeit und Kapital, 「新ライン新聞」所載, ケルン, 1849 四月 —序6
- 「共産黨宣言」 (エンゲルスと共著で) Manifest der Kommunistischen Partei, ロンドン, 1848. —序5
- ▼ンデヴィル, サー・ジョン 「航海と旅行」 Voyages and Travels, ロンドン, 1705. —131
- ミッセルデン, E. 「自由貿易, 即貿易振興策」 Free Trade. Or, the Means to make Trade flourish, wherein, the Causes of the Decay of Trade in this Kingdom are discovered; and the remedies also to remove the same are represented, ロンドン, 1622. —141, 149, 150
- ミュラア, アダム 「政治學の初歩」 Die Elemente der Staatskunst. 3 Bde., ベルリン, 1809. —67
- ミル, ジェームス 「商業の辯護」 Commerce defended. An Answer for the Arguments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett, and others, have attempted to prove that Commerce is not a Source of National Wealth, ロンドン, 1808. —103
- 「經濟學原理」 Elements of Political Economy, パリソによる佛譯, パリ, 1823. —222
- モンタナリ, ゲミニアーノ 「貨幣論」 (1680/87) Della Moneta, trattato mercantile etc., 「イタリ—經濟學の古典的文獻, 古代の部」第三卷所收, クストデイ編, ミラノ, 1804. —22, 181
- ヤコブ, ウィリアム 「貴金屬の生産および消費に関する研究」 An Historical Inquiry into the Production and Consumption of the Precious Metals, 第二卷, ロンドン, 1831. —120, 157

- ベラノス, ラミレツ・C.M. ド「著作集」Obras, バルセロナ, 1839/40. —44
- リカード, デヴィッド「地金の價格騰貴, 銀行紙幣の減價の一證左」The High Price of Bullion. A proof of the Depreciation of Bank Notes, (1809), 第四版, ロンドン, 1811. —206, 215, 216
- 「地金委員会の報告に關するボザンケ氏の實際的諸考察に答ふ」Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee, ロンドン, 1811. —203, 212
- 「經濟的で安全な流通要具に關する提案」Proposal for an Economical and Secure Currency; with Observations on the Profits of the Bank of England, (1816), 第二版, ロンドン, 1816. —207
- 「經濟學原理および租稅論」On the Principles of Political Economy and Taxation (1817), 第三版, ロンドン, 1821. —52, 207
- ルッター, マルティン「商業と高利貸についての書」Von Kauffshandlung und Wucher ウィッテンベルグ, 1524, (ルッター全集所収, ウィッテンベルグ, 1589, 第六部) —149
- ロック, ジョン「利子の低下に關する若干の考察」Some Considerations on the Consequences of the Lowering of Interest and Raising the Value of Money, (1691), 全集第二卷所収, 第七版, ロンドン, 1768. —72, 75, 173

無記名の文献

- 「アルゲマイネ・アウグスブルグ新聞」Allgemeine Augsburger Zeitung, 1842. —序2
- 「銀行家の通貨問題評論」The Currency-Theory Reviewed; in a Letter to the Scottish People. By a Banker in England, エディンバラ, 1845. —120
- 「エコノミスト」Economist, 1858 十月十日附 —115
- 「銀行條令に關する報告」Report on Bank-Acts, 1857 七月十四日 —228
- 「新ライン新聞」Neue Rheinische Zeitung, 1848/49. —序5
- 「スペクテーター」The Spectator, 1711 十月二十六日および十一月十九日附 —41, 191
- 「獨佛年誌」Deutsch-französische Jahrbücher, 1844. —序2, 序5
- 「ニューヨーク・トリビューン」New-York-Tribune, —序6
- 「ライン新聞」Rheinische Zeitung, 1842/43. —序2

人名索引

[ア]

- アークハート, デーヴィッド** Urquhart, David (1805-1877) イギリスの外交官にして著述家。イギリス政府(パーマーストン卿)の親露的東洋政策に反對してトルコの味方をした。—72
- アットウッド, タマス** Attwood, Thomas (1783-1856) イギリスの政治家にして貨幣著述者。—81
- アテナユス, ナウクラティス** Athenaeus aus Naukratis (三世紀初頭) ギリシアの修辭家。—68
- アーバスノット** Arbuthnot (1802-1865) イギリス官吏, サー・ロバート・ピールの秘書。—227
- アリヴァベヌ伯, ジャン, コムト・ド** Arrivabene, Jean, Comte de (1787-1881) イタリアの政治亡命者, 1847年ブラッセル經濟會議の司會者。セニョルの友人にして經濟學上の著述のフランス語への翻譯者。—154
- アリストテレス** Aristoteles (紀元前 384-322) ギリシアの哲學者。「古代哲學者中の最も全能な頭腦」(エンゲルス)。—3, 26, 39, 60, 130, 131, 159, 185
- アレティノ, ピエトロ** Aretino, Pietro (1492-1556) イタリアの著述家, パンスレット作家, また諷刺作者。法皇および諸侯に奉仕。—203

[ウ]

- ウヰリアム一世 (征服王)** William I. (der Eroberer) (1027[?]-1087) イングランド國王。—69
- ウヰリアム三世 (ウヰリアム・フォン・オラニーエン)** William III. (1650-1702) 1689年より1702年までイングランドの國王。—73, 80
- ウヰルソン, ジェームス** Wilson, James (1805-1860) イギリスの經濟學者, 自由貿易論者, 雑誌「エコノミスト」の創始者。—217, 229, 230
- ウスタリツ, ジェロニモ** Uztariz, Jerónimo (1730年と1742年の間に死) スペインの經濟學者, 重商主義者。—44

[エ]

- エドワード三世 (ウィンゾアの)** Edward III. (1312-1377) 1327年より1377年までのイギリス王。—70
- エンゲルス, フリードリッヒ** Engels, Friedrich (1820-1895) —序5

〔オ〕

オヴストーン卿 (サムエル・ジョンス・ロイド) Overstone, Lord (Samuel Jones Loyd) (1796-1883) イギリスの銀行家、通貨原理の代表者、その原理の上に立てられた1844年の銀行法の主唱者。—211, 227, 228

オーエン, ロバート Owen, Robert (1771-1851) イギリスの空想的社会主義者。前身は工場主であるが、その工場で自分の共産主義を實踐的に施すことを考へたが、官権のあらゆる干渉はこれを拒否した。アメリカに共産主義の植民地を建設しようといふ彼の試みも失敗した。そこで「彼は自ら労働者階級に投じて、まだ三十代の中年を勤勞しつゞけた。すべての社会主義運動の、イギリスにおける労働者側の成功に歸したあらゆる現實の進歩は、オーエンの名にむすばれてゐる」(エンゲルス)。—51

オブダイク, ジョージ Opdyke, George (1805-1880) アメリカの經濟學者、ニューヨークの銀行家、のちにニューヨーク市長。—103

〔カ〕

カットン, ウキリアム Cotton, William (1786-1866) イギリスの商人、自動的金秤の發明者。—122

カト, マルクス・ポルキウス Cato, Marcus Porcius (紀元前 95-46) ローマの政治家。—146

ガリアニ, フェルディナンド Galiani, Ferdinando (1728-1815) イタリアの教父にして外交官。重商主義の經濟學者として重農學派に反對して書いた。—15, 49, 67, 92, 113, 182

ガルニエ, ジェルメン, コムト・ド Garnier, Germain, Comte de (1754-1821) フランスの經濟學者、ボナパルト黨の上院議員、「執政官と統領の經濟學者」(マルクス)。アダム・スミスの翻譯者にして註釋者。—69, 120

カルリ, ジョヴァンニ・リナルド Carli, Giovanni Rinaldo (1720-1795) イタリアの天文學者にして經濟學者。重商主義者に反對した。—179

〔キ〕

ギゾー, フランソア・ピエール・ギョーム Guizot, François Pierre Guillaume (1787-1874) フランスの反動政治家、1840年より1848年まで首相、フランスおよびイギリスに關する歴史的研究の著者。—序3

キャッスルリー, ロバート・ステュワート Castlereagh, Robert Stewart (1769-1822) イギリスの反動的政治家。—80

〔ク〕

クセノフォン Xenophon (紀元前 430年に生れ、死の年代不詳) ギリシアの將軍にして歴史家、ソクラテスの學徒。—157, 158, 159, 186

クーバー, トーマス Cooner, Thomas (1759-1840) イギリスの自然哲學者にして政治家。—15, 16

グラッドストーン, ウキリアム・エワート Gladstone, William Ewart (1809-1898) イギリスの政治家。最初は保守黨、のちに自由黨の指導者。—55

グリム, ヤコブ Grimm, Jakob (1785-1863) ドイツの言語學者。—184

クレイ Clay (1791-1869) イギリスの政治家。—227

グレイ, ジョン Gray, John (1798-1850) 空想的社会主義者、オーエン學徒。社会問題を「労働貨幣=交換社会」(エンゲルス)によつて解決しようとした。—83, 84, 85, 86, 87

クロンウェル, オリヴァー Cromwell, Oliver (1599-1658) イギリスの政治家、1648-49年のブルジョア革命の指導者、のちに1653年より1658年までイギリス共和國の「護民官」(大統領)。—42

〔ケ〕

ケリー, ヘンリー・チャールズ Carey, Henry Charles (1793-1879) アメリカの經濟學者、リカード—地代論の反對者、最初は自由貿易論者、のちに保護關稅論者。—237, 238

ケルナー Körner, M. G. —185

〔コ〕

ゴットシェット, ヨハン・クリストフ Gottsched, Johann Christoph (1700-1766) ドイツの美學者にして文學史家、術學者の典型。—203

コベット, ウキリアム Cobbett, William (1763-1835) イギリス評論家、普通選挙や労働者の地位改善のために闘つたチャーティストの先驅者、法律家、「この時代のイギリス最大の政治著述家」(マルクス)。—103

コルベット, タマス Corbet, Thomas 十九世紀前半のイギリス經濟學者。—103

コロンプス, クリストーフ Columbus, Christoph (1446-1506) イタリアの航海者、アメリカ大陸發見者。—190

〔サ〕

サン・シモン, クロード・アンリ, コムト・ド Saint-Simon, Claude Henri, Comte de

(1760-1825) フランスの空想的社会主義者。「天才的な広い視角をもち、そのために彼に、のちの社会主義者たちにはほとんど皆無な厳正なる経済思想を、すでに胚芽の形で示すことを得せしめてゐる」(エンゲルス)。—100

[シ]

シアーベル Schaper v. 1837年より1842年までのトリエルの知事、その後1845年までフイン地方の長官。—序2

シェヴァリエ ミシェル Chevalier, Michel —131, 187

ジェノヴェジ アントニオ Genovesi, Antonio (1712-1769) イタリアの神学者、哲学者、ロック學徒、重商主義者。—36, 141

シスモンディ ジャン・シャルル・シモンド・ド Sismondi, Jean Charles Simonde de (1773-1842) スイスの経済学者にして歴史家、経済的ロマン主義の立場に立ち古典経済学を批判した。「彼があらゆる點で、自らを古典経済家たちと區別してゐる點は、彼が資本主義の矛盾を指摘したといふことによつてである。これは一面である。他の面においては、いかなる場合にも、古典派の分析をほとんど進めてゐない(またそれを欲してゐない)。また従つて、小ブルジョアの立場から一種のセンチメンタルな資本主義の批評をするだけにとどまつてゐる」(レーニン)。—40, 52, 103

シュタイン ルドウィヒ Stein, Ludwig (1815-1890) ドイツの歴史家にして経済学者、キール大學教授、のちにウィーンの教授。「木製の三又の中に石を(ならべた)(三頂體)のやうに、若干のヘーゲル式範疇いぢりど、もつとも平凡なものだが、考へもなく並列されてゐる」(マルクス)。—5, 16

シュレミール ピーター Schlemihl, Peter —129

ジョージ二世 Georg II. (1683-1760) 1727年より1760年までの大ブリテン・アイルランドの國王。—68, 71

ジョージ三世 Georg III. (1738-1820) 1760年より1820年までのイングランド國王。—68

[ス]

ステュアート サー・ジェームス Steuart, Sir James D. (1712-1780) イギリスの経済学者、彼の學説は、マルクスによれば、重商主義の合理的な表現である。「資本の解釋についての彼の功績は、生産諸條件の間の分離過程と同様に、一定階級の所有と労働力とから生ずることを證明してゐる點にある」(マルクス)。利潤は價值を超過する價格の過剰分なりと説明してゐる。—47f, 74f, 194, 199f, 228, 230, 236

ストラボ Strabo (前63—後19) ギリシアの地理学者。—186

ストルヒ アンリ Storch, Henry (1766-1835) ロシアの経済学者、アダム・スミスの反對論者。—130, 154, 252

スピノザ バルーフ (ベネディクトゥス) Spinoza, Baruch (1632-1677) オランダの有名な哲学者、汎神論者。エンゲルスは彼を近代哲学における辯證法の輝かしき一代表者と名づけてゐる。—202, 246

スペンス ウキリアム Spence, William (1788-1860) イギリスの著述家。「商業に依存せざる英國」といふ、ちらし本の著者。—103

スミス アダム Smith, Adam (1723-1790) イギリスの経済学者にして倫理学者、古典経済学にその發展せる形態を與へた。マルクスは彼を手工場時代の経済学者と名づけてゐる。彼の學説においては、諸國民の眞の富は貨幣——重商主義者が主張するごとく——においてあるのではなくして、むしろ有用な交換價值を生み出す労働においてあるのである。スミスによれば、重農主義者の場合におけるごとく、農業のみならず、工業労働も、價值および剩餘價值を創り出す。「アダム・スミスの矛盾は、重要な意味があるのであつて、その矛盾には問題を含んでをり、もちろん彼はそれを解決しなかつたが、彼が矛盾に陥つたといふことによつて表明されてゐる意味がある」(マルクス)。—17, 41, 44, 49f, 62, 69, 143, 171, 202f, 235, 237, 240, 260, 268

スミス卿 トマス Smith, Thomas イギリスの政治家。—168

[セ]

セイ ジャン・バティスト Say, Jean Baptiste (1767-1832) フランスの俗流経済学者、マルクスによれば一人の「憐れむべき人間」で「彼はその陳腐な淺薄さをかくすために、アダム・スミスの半盲目と失敗とを絶對的一般的な語句として解釋しようと努めてゐる」。彼に續く俗流経済学者たちとことなる點は、彼は「まだまつたく仕上げられてない素材をみだした。従つて経済学者の立場から、多少とも経済學上の問題の解決に協力したことである」(マルクス)。—18, 54, 103, 203, 252

セニヨル ウキリアム・ナッソー Senior, William Nassau (1790-1864) イギリスの経済学者。「既存のものゝ單なる辯護者であつて、従つてまた俗流経済学者」「教養あるブルジョアの代辯者」(マルクス)。—153, 168

[ソ]

ソムブソン ウキリアム Thompson, William (約1785-1833) イギリスの経済学者、オーエンの徒。オーエン流共産主義の最も重要な科學的代表者。—87

[タ]

ダリモン アルフレッド Darimon, Alfred (1819-1870年以後死) フランスの政治家、ブルードン主義者、「人民の代表」「人民の聲」「人民」の編輯者、のちに「プレス」の協力者。—87

〔チ〕

チャールズ二世 Charles II, (1630-1685) 1660年より1685年までイングランド國王。
—42

〔テ〕

デイル, ユージェヌ Daire, Eugène —44, 101

テーク, タマス Tooke, Thomas (1774-1858) イギリスの經濟學者, 著名な「價格の歴史」の著者, 彼は通貨原理の理論家たちとは反對の立場に立つ。マルクスは彼を「いくらか價值のある最後のイギリス經濟學者」と名づけてゐる。—103, 217, 219, 228, 230, 231

〔ト〕

ドット, ジョージ Dodd, George (1808-1881) イギリスの著述家。—120

トレンス, ロバート Torrens, Robert (1780-1864) イギリスの士官にして經濟學者, 自由貿易主義者, いはゆる通貨原理の主たる代表者の一人。—227

〔ナ〕

ナポレオン (一世), ボナパルト Napoleon, Bonaparte (1769-1881) —217, 218

〔ニ〕

ニウマーク Newmarch —230

〔ノ〕

ノーマン, ワード Norman, G. Warde (1793-1882) イギリスの經濟學者, なかんづく貨幣制度と銀行制度とについて書いてゐる。イングランド銀行總裁。—227

〔ハ〕

バークレイ, ジョージ Berkley, George (1685-1753) アイルランド教會監督, 哲學者, 保守主義者。主觀的觀念論の創始者で「感覺的に知覚しうべき客體は, それ自體として精神の外に」存在することを主張する。—15, 16, 76, 130, 132

バスタチア, フレデリック Bastiat, Frédéric (1801-1850) フランスの俗流經濟學者, 自由貿易論者。—18, 237, 258

バーボン, ニコラス Barbon, Nicolas (1640-1698) イギリスの經濟學者, 重商主義の反對者, 自由貿易の擁護者。—76

バーレイ卿, ウキリアム・セシル Burleigh, William Cecile, Lord (1520-1598) イギリスの政治家。—168

〔ヒ〕

ヒューム, ジェームス・デアコン Hume, James Deacon —219

ヒューム, デヴィッド Hume, David (1711-1776) イギリスの哲學者, 不可知論者。ヒュームは, 我々には感覺のみが與へられてゐるといふことを主張することによつて, 世界認識の可能性を唱へた。經濟學者としてのヒュームは重商主義の反對者, 自由貿易の不徹底な一學徒であつた。十八世紀における商品價格は流通しつゝある通貨の量に依存するとなす理論(數量説)の最大の代表者。—191f, 202, 204, 205, 206, 222, 224, 228

ピール, サー・ロバート Peel, Sir Robert (1788-1850) イギリスの政治家, トーリー黨員, 1844年の銀行條令は彼の名を冠せられた。「この土地貴族黨の指導者にまで出世したブルジョアの子は, その認可をブルジョアに強制するため(穀物關稅の廢止)つねに……その支配權を……利用した」(マルクス)。—55, 68, 81, 211, 227

〔フ〕

フィリップ二世 Philipp II. (1528-1598) スペイン國王。—146

フォルボネイ, フランソア・ベロン・ド Forbonnais, François Veron de (1772-1800) フランスの財政家にして經濟學者, 重商主義者にして保護關稅論者, 重農主義の反對者。—198

フカナン, デヴィッド Buchanan, David (1779-1848) イギリスの經濟學者。「重農主義の偉大なる反對者」(マルクス)。—125

ブッシュ, ヨハン・ゲオルク Büsch, Johann Georg (1728-1800) ドイツの經濟學者, 數學教授にして商業大學總長。—203

プラト Plato (紀元前約348年頃) ギリシアの哲學者, 奴隸所有階級の觀念論者, 客觀的觀念論の創始者。彼の學説によれば, 事物の理念は, 永遠にして, 不變であり, 空間と時間のほかに眞實に存在するものとして, 移りやすい感性的なものに對立してゐる。—130, 131

フラートン, ジョン Fullarton, John (1780-1849) イギリスの經濟學者, いはゆる銀行學派に屬し, 通貨論の批判をだした。—229, 231

ブラン, ルイ Blanc, Louis (1811-1882) フランスの歴史家, 小ブルジョア的社會主義者。—201

フランクリン, ベンジャミン Franklin, Benjamin (1706-1790) アメリカの政治家にして經濟學者, アメリカ獨立運動に重大な役割を演じた。アメリカにおける啓蒙運動

- の最も重要な代表者。—45, 46, 130, 131, 198
- プリニウス**, カユス・セクンドゥス Plinius, Cajus P. Secundus (der Aeltere) (23-79) ローマの學者、執政官にして軍人、三十七卷の博物學を書いたが、ベスピアス山の爆發の際に失つた。—152
- ブルーガム侯**, ヘンリー・ベーター Brougham, Henry Peter (1778-1868) イギリスの法律家にして政治家、ホイッグ黨員。—51
- ブルードン**, ビエール・ジョゼフ Proudhon, Pierre Joseph (1809-1865) フランスの著述家、反動的小ブルジョアの社會主義者、無政府主義の理論的建設者の一人。ブルードンは「經濟的諸範疇を……永久的な理念につくり上げ、そしてかうした迂廻ののち再びブルジョア經濟學に舞ひ戻つた」。彼の社會主義は「俗悪ユートピア」である。「それゆゑに、一度でも彼は、眞に科學的な辯證法を理解しえなかつたので、それを單に詭辯學とのみ考へた」(マルクス)。マルクスがそれに反對して「哲學の貧困」を書いた。ブルードンの諸理論は、フランスにおいては長い間大きな影響力をもつてゐた。—序5, 54, 84, 87, 237, 274
- ブレイ**, ジョン・フランシス Bray, John Francis (1809-1895) イギリスの空想的社會主義者、チャーティスト。—87
- ブレーク**, ウェリアム Blake, William イギリスの經濟學者、貨幣の流通と救貧制度に關する若干の著述の著者。—112, 219
- プロベルツ** Properz (セクスツス・プロベルティウス)(紀元前一世紀中頃に生る) アウグストゥスの時代のローマ悲劇詩人。—5
- プロメシウス** Prometheus ギリシア神話に現はれる文化的英雄。—237

[へ]

- ヘーゲル**, ゲオルク・ウヰルヘルム・フリードリッヒ Hegel, Georg Wilhelm Friedrich (1770-1831) ドイツ古典哲學の最大の代表者、客觀的觀念論の代表者、辯證法の獨創的發見者、その最初の意識的利用者、ヘーゲルにあつては辯證法はもろもろ觀念論的であつて、それはマルクスがいへるごとくきかだちをしてゐた。—序3, 263, 265
- ペティ**, ウェリアム Petty, Sir William (1823-1887) イギリスの經濟學者にして統計家、「近代經濟學の建設者にして、最も天才的、最も獨創的經濟學者の一人」(マルクス)。—15, 40f, 141, 149
- ペーテル大帝**, Petre "der Grosse" (1672-1725) 1682年より1725年までのロシア皇帝。—130
- ベルニエ**, フランソワ Bernier, François (1625-1683) フランスの著述家にして哲學者。—148, 149

- ベーレー**, サムエル Bailey, Samuel (1791-1870) イギリスの哲學者にして經濟學者、リカードの論争者、マルクスは「下劣な、皮相的な、悪がしこい批評家」と名づけた。—66, 168
- ペレイ**, イサーク Pereire, Issac (1806-1880) フランスの銀行家、サン・ジモジ主義者、「動産銀行」の共同創始者。—100

[ホ]

- ボアギューベル**, ビエール Boissguillebert, Pierre le Pesant, Sieur de (1646-1714) フランスの經濟學者、重農主義の先驅者。フランスにおける古典經濟學は彼に始まつた。—40, 43, 44, 52, 101, 112, 141, 142, 144, 172
- ボザンケ**, ジェームス・ワツマン Bosanquet, James Whatman (1804-1877) イギリスの經濟學者、銀行の出資者。—103, 212
- ホッジスキソ**, トーマス Hedgskin, Thomas (1787-1869) イギリスの經濟學者。古典經濟學にたいするプロレタリアの對照の代表者であるが、リカードの理論に磨かれ、「資本主義的生産のあらゆる經濟學上の前提を永久的形態として受け容れ、かつその基礎であると同時に結果である資本のみを抹殺しようとする」(マルクス)。—39
- ホブズ**, トーマス Hobbes, Thomas (1588-1679) イギリスの哲學者。「ベーコン的唯物論の大成者……物理的運動が機械的あるひは數學的なものの犠牲となつてゐる……唯物論が厭世的となつてゐる」(マルクス)。絶對的君主政治の味方。—40
- ホーマ** Homer 傳說的ギリシア詩人、「イリアッド」と「オディッセー」の叙事詩は彼の作とされてゐる(紀元前約十世紀頃にできた)。—203
- ホラーツ**, クィンツス・フラックス Horaz, Quintus Flaccus (紀元前 65-8) 最も有名なローマの抒情詩人、頌歌と諷刺詩を書いた。—153

[マ]

- マカロック**, ジョン・ラムセイ MacCulloch, John Ramsay (1789-1864) イギリスの經濟學者、資本の辯護者。「リカード-經濟學の俗解者にして、同時にその解釋の最も憐れむべき模倣者である」。「貨幣・租税などに關する彼の最後の諸著作は、そのときどきのホイッグ黨内閣のための單なる代辯にすぎない。それゆゑにこの男は利益のある地位に用ひられた」(マルクス)。—16, 41
- マクラレン**, ジェームス Maclaren, James スコットランドの經濟學者。—65, 202, 203, 204
- マクレオド**, ヘツリー・ダニング Macleod, Henry Dunning (1821-1902) スコットランドの辯護士にして信用理論家。—54, 167
- マータ**(アングィエラ), ビータア Martir (Anghiera), Pedro (1457-1526) イタリアの

歴史家、フランス國王ルイ十一世の侍醫、それからスペインのイサベラ朝廷の教師。偉大な発見者たちや侵略者たちと交際して、彼らの発見に關する多くの著作を書いた。—183

マルサス, タマス・ロバート Malthus, Thomas Robert (1766-1834) イギリスの僧侶にして經濟學者、「老練な剝奪者」。彼の眞の功績は「資本と労働との間の不等の交換の上に力點をおいたといふことにある」。しかし、そのために彼は「一方には労働者階級の貧困を必然的なものとして證明し……他方では資本家たちを教會ないし國家の一つの節度ある僧侶たるべきものと證明することにより」労働者の貧困化は、人口増加に比例して生活資料の生産が不十分であることから生ずると説明し、かつプロレタリアートに産兒制限を奨励するといふ手段に訴へたのである。—103

マンデヴィル, ジェハン (「ジョン・マンデヴィル卿」) Mandeville, Jehan de ("Sir John Mandeville") ある旅行案内の編纂者のペンネームで、この書は 1357-1371 年にイングランドで出版され、多數の外國語に翻譯されて、非常に普及した。—131

[ミ]

ミッセルデン, エドワード Misselden, Edward (十七世紀初頭に生存) 商人, 1623 年と 1633 年との間にデルフトのある商事會社の社長, 東印度會社に奉職, 常設委員會の委員。—141, 147, 149, 150

ミュラー, アダム Müller, Adam (1779-1829) ドイツの政治家にして經濟學者。經濟學上のロマン主義者で、その「瞑想とは……地上の砂煙を注視してゐると、この塵まみれのは、借越にもなにか秘密に満ちたものであり、かつ最も意味のあるものとして發現するといふことにある」(マルクス)。—67, 68

ミル, ジェームス Mill, James (1773-1836) イギリスの歴史家、哲學者にして經濟學者。「リカアダーの理論を體系的形態に表現した第一人者」。彼の試みにおいては、リカアダーの理論の矛盾を除去しようとしてゐるが……彼自身矛盾に陥つた、これらの矛盾を解決しようとした彼の試みは、同時に理論にたいする初步的解釋を露呈するもので、この試みではドグマに陥つてゐる」(マルクス)。—102, 103, 219, 222

ミル, ジョン・ステュアート Mill, John Stuart (1806-1873) ジェームス・ミルの子、イギリス哲學者にして經濟學者、自由貿易論者にして折衷論者。古典經濟學の後繼者として、彼はリカアダー學派の解釋を完成した。彼はそれらの學說と、プロレタリアートの社會主義的諸要求との間の一種の妥協を求めてゐる。—102, 239

[メ]

メンデルスゾーン, モーゼス Mendelssohn, Moses (1729-1786) ドイツの小ブルジョアの哲學者、「おしやべりやの典型」(マルクス)。—202

[モ]

モンタナリ, ゲミニアーノ Montanari, Geminiano (1633-1687) イタリアの數學者にして天文學者、貨幣に關する二つの著書「Breve trattato del valore delle monete etc.」(1680) と「La zecca in consulta di stato, trattato mercantile etc.」(1687) の著者、「貨幣論」の題下にクストデイによつて公刊された。—22, 181

モンテスキュー, シャルル・ルイ・ド Montesquieu, Charles Louis de (1689-1755) フランスの政治的著述家、歐大陸自由主義の始祖、いはゆる數量説の代表者。—191, 199

[ヤ]

ヤコブ, ウキリアム Jacob, William (1762-1851) イギリスの統計學者。—119, 142, 156, 157

ヤング, アーサー Young, Arthur (1741-1820) イギリスの著述家にして統計家。—201

[ユ]

ユリウス, グスターフ Julius, Gustav (1810-1851) ドイツの急進主義著述家にして經濟學者、「ライプツヒヒ・アルグマイネ・ツァイトゥング」の編輯者にして「ベルリン新聞會誌」の發行者。—203

ユーリピデス Euripides (紀元前 480-406) ギリシアの劇作家。—159

[ヨ]

ヨヴェラノス, ラミレツ・カスバル・メルコール・デ Jovellanos, Ramirez Caspar Melchor de (1744-1811) スペインの著述家、經濟學者。—44

[リ]

リカアダー, デーヴィッド Ricardo, David (1772-1823) イギリスの經濟學者、古典經濟學の最後の偉大な代表者で、またその絶頂である。マルクスが次に述べるやうに、彼は労働時間による價值規定から出發した。「リカアダーは、經濟的階級對立——それを内在的對立としてゐるごとく——を摘發し言及してゐる。従つて、その經濟學においては歴史的闘争と發展過程が根柢から把握され、暴露されてゐる」(マルクス)。しかしながら、リカアダーは資本主義的生產方法の歴史的本質を理解せず、それを永久的なものとして把握した。ヒュームの誤れる貨幣論の代辯者。—40, 51f, 103, 114, 189, 202, 205f, 215f, 224f, 235, 254, 256

リスト, フリードリッヒ List, Friedrich (1789-1846) ドイツの經濟學者、ドイツにおける資本主義的生產方法の自立的發展のための闘争を行つた。1848 年以前のドイツブル

ジョアジエの理論的代表者。「機械によつて手労働を、近代工業によつて家内工業を駆逐するために、ブルジョアジエの、なかんづく、大産業資本家の支配……のため宣傳する」(マルクス)のために、保護關稅制度を持ちこんだ。—17

[ル]

ルソー、ジャン・ジャック Rousseau, Jean Jacques (1712-1778) フランスの著述家、フランス大革命前の革命的ブルジョア階級の最大の觀念論者。啓蒙の理念に捉はれてはゐたが、同時にまたその合理主義には反對であつた。彼は生得平等の自然状態を讚美した。ルソーによれば文明の發達は、専制君主制の不平等をその最高段階にまで導く、そしてまさにそのことによつて、社會契約 (contrat social) の新しい平等へと導かれるのであるが、彼の場合におけるこの契約は、資本主義的商品生産關係にたいする單なる一つの理念的表現でしかない。—235

ルッター、マルティン Luther, Martin (1483-1546) ドイツ宗教革命の指導者、プロテスタント陣營、ブルジョア的な最も溫和な改革の代表者。ドイツ農民戦争の際は、タマス・ミュンツェルによつて代表せられる革命的農民と都市の平民にたいする反革命的、カトリック的陣營に身を投じた。—149, 165, 172

ルードヴィヒ十四世 Ludwig XIV. (ルイ十四世) (1638-1715) 1643年より1715年までのフランス國王。—43, 44

[ロ]

ロウ、ジョン Law, John (1671-1729) スコットランドの財政家にして經濟學者。1716年パリに國家の特許を得た發券銀行を創立し、フランスの國債を償還するために、わづかの補償資金で紙幣を發行した。財政検査官、1720年その地位を引退した。—198, 201

ロック、ジョン Locke, John (1632-1704) イギリスの哲學者、先天的觀念に関するデカルト學說を克服して、認識を経験の上に引き戻した。—72, 74f, 135, 173, 191, 197, 204

ローンデス、ウキリアム Lowndes, William (1652-1724) 1695年以來イギリスの大蔵秘書官。同年に「銀貨の改良に関する試論をふくむ報告」といふ題で、本位問題に関する彼の諸研究を發表した。—73f, 81, 135

昭和二十一年十一月十五日初版發行

定價金四拾圓

經濟學批判



翻譯者

猪俣津南雄

發行者

藤岡淳吉

印刷者

岩崎史郎

配給元

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二丁目九番地

發行所

東京都神田區
駿河臺二丁目十番地

株式會社

彰考書院

會員番號A-119021
電話神田(25)二七五七番
振替口座東京八二五五番

大倉印刷株式會社印刷

終